

逢ひ度く、かの子が平生いつてゐた自分のいのちの生活は現實を中心とするといふ言葉を心頼みに、もう一度必ず現實で逢ふべし、眼も鮮やかなかの女に逢ふべし。逢ひ逢ぐるまでは永劫でも待つ。かの女來り得ずば、私よりのかの女の呼ぶところへはどこへなりと踏み込んで行く。

私の男女の間の愛の欲求はかういふ形を望む故に、宇野さんの紹介された抽象合體の説は、何等か距ての事情に妨げられ敗北した非力ないのちが、せめて次善の策に煙のやうになつて、一つが一つに忍び入り生き保つて行く、いのちの生活としては負惜しみの方法のやうに思へた。かの子は勁くて青眼に來る女だ。私に再び見ゆる場合は、いつも他所から自家へ歸つて來たと同じやうに、呼鈴を凜々と鳴らし、開けてやる硝子戸の隙ももどかしく牝獅子のやうに飛付いて「パ、歸つて來たのよ」と、私の胸を丸い小さい拳によつて亂打するであらう。でなければ、長距離電話をぢやん／＼かけて來て「パ、早くよ。なぜ早く來て呉れないの」と怨するだらう。かの女と私との再會は、相對の關係歴然としたかうした形に於て現すべきものである。

止み難い欲求は私にかう肚を決めさせ、この希望によつて私は日々どうやら空氣を吸ひ、飯も食へた。肚は決まつてをり希望は前途に在る。自分のいのちを支へる心棒はある筈だ。

だが心や感覺は頑是ない。聴き分けのない私の心や感覺よ。心は手離しに泣き叫んで、すぐにもと、かの女の肉聲の慰めのひと言を戀ひ、かの女の着慣れた着物の端の一片でも襖の蔭にほの見えると、私の感覺は身を斬るやうな切なさや身體中に傳へる。私は痺れて居竦む。

この間、村岡花子さんに公の會で同席したら、村岡さんはかういはれた「あたしたちがびんびんして丈夫で生きてゐるのを見ると、あなたは憎らしくなるでせう」と。この女性も女史と同じく肥り型でくりくりしてゐる。今は全くその氣持はなくなつたが、當時は往來へ出て肥り型の女性が眼に入ると私は、村岡さんのいつた通りだつた。

八ヶ月の間、私はかの女が寢室にしてゐる眼が覺めると、夜中でも小机にスタンドをつけ執筆した茶室造りの部屋で、身體もできるだけ小さく躡まつて仕事をした。心にも感覺にも觸れる刺戟の面積を少くしようためである。この部屋はほの暗く、蟄してゐる私は自分で自分穴の中の貉じがのやうにおもへた。血の氣は悉く涙にして流して、かの女のために流す涙ならば何かかの女のためになるものであらう。佛神も照覽あるべし。私はかう思ひ涙を流すままに任せて一度も拭つたことはない。拭つたり擦り拂つたりすることは、かの女に與へる涙の價値を減らすやうに思へたから。稀に會ふ訪問客の前でも、私は涙の流し放しの顔を平氣

で見せて、一遍も紛らしたり拭つたりしたことはない。かの女自身、生涯の涙の流し方がざつとかういふ勇ましいものだったから。

私の仕事といふのはかの女の遺稿の整理の外、かの女の追憶に関する文章、それから巴里のむす子にやる手紙を書くことだった。いくら頼まれたとはいへ、私に取つて専門外の禿筆で、かの女の追憶に関する文章を、八ヶ月間に、合せて四百枚ほど書いてゐる。涙がそれをさせた。涙はどこから出るものだらう。かの女を憶ふときに、どこか身體の中のいのちの附根のやうなところから、に一つと浸み出して来る。その感じを筆に移せばどうやら書けた。私のいのちの附根に半分殺ぎ取られた痕があり、その痕はいつも濡れてゐる、かの女を憶ふとき心はそれに觸れるので、かう潜々と盡くる期なく液體が流れ出るのであらう。液體が私の心から眼へ流れ出るとき、私はかの女のいぢらしかつたところを、かの女の佛と共に體觸的に感ずる。それは虹が野山にかかるやうに、現實には在りとしもおもへず、さればとて無いとは決しておもひ切れない。ああ、かの子よ、おまへは何と人を焦らす女だ、パ、は我慢できない、怒るぞ。するとかの女の聲がまさしくと聞える。「パ、は私が眠つてから後、ほんとはよく泣いて呉れるのね」と。かくて私はまた眼鏡の雫を拭はねばならない。この涙

だけは拭はねば紙が見えなくて物が書けない。

人間の血の氣を悉く涙にして流し、残る形貌はいよ／＼穴の中の貉のやうに蝨し込んでしまつた私は、過ぎる時日を定かには辨へず、悲しみに疲れ果てて意識がくらむとき眠り、夢破れてあらはに悲しみを感ずるとき、覺めて起き上り仕事に就く。よる晝なく、ひと日をふた日とし、二日三日を一日と感ずる事もある。穴の貉の生活に食事の期も定まつてはゐない。かの子眠り去つて後、主婦なき家の召使ひは使ひ切れぬものと思つて、男世帯を張り通して來た家の中は食物も偏つてゐる。飯を飯櫃に移すのも面倒なまま、釜なり磨鉢に嵌め入れたのを、腹が減るたび手元へ引き寄せ、冷飯の釜底にぼろ／＼に乾しついた層まで、何度も掘り搦つて食ふ。お菜も煮る焼くは面倒と、さしみ、海苔、かま鉾等醬油につけさへすれば食へるものを取寄せて食ふ。私が鱈の子を好きなのをよい事にして、

けふも鱈の子

あすも鱈の子

ラ、ラ、ラ、鱈の子

と泣き笑ひして流行唄にして唄ひ度いくらゐ、うちの男どもは、私に鱈の子は面倒がない

ので宛がひ續ける。

それぢやあんまり衛生によくないと、かの子の實家の姪御が、定紋描いた梅鉢に野菜を煮て一ぱい入れ、六代目の扮する豆腐買ひのやうな恰好をして、差入れに来て呉れたのでだいぶ助かつた。澤庵ばかり買つて食つてゐるのを氣の毒がり、澁谷の知人の妹御が糠みそ漬を糠ごと重箱に入れたものを、洋装にハイヒールの靴音朗らかに、根氣よく差入れに来て呉れたのも助かつた。

ご近所の齒醫者の奥さんが、私共が味噌汁を戀うてゐるのを知り、鍋に拵へて持つて来て下さる。

ぶしやうな男世帯は、結局貫ひもので食ひ繋いで行く態のよい乞食の生活になり下る。あまり褒めた事ではない。しかしこの一年近くの間、私共がビタミンにも、カルシウムにも事缺かず壽命を保つて來たのは、これ等の女性の母性的憐愍の情の發露による。記してその徳を表す。

私共自身はかうでありながら、かの子を祀れる床の間の靈前には、誰れ供へるとなく毎日茶湯香華の式飾絶えぬのみならず、神戸ユーハイムの洋菓子、山陰ゆみが濱の梨子等、およ

そ天下の美味と贅味は、眠前に異らすかの女の好みに添うて供へられるほか、かの女の遺稿の冊書として新刊せられたるはもちろんのこと、およそかの女に興味ありと覺しき、新聞雜誌の記事、郵書の書信等は、その部分を開いてかの女の判讀に便にしてある。讀書欲の旺盛なかの女は眠後もなほそれを續け、生命の成長に培ふであらう、この見地から知友寄贈の新著を眞つ先に、必讀の要ありと考へられる發刊の新著はなるべく購入して供へてある。觀音經讀誦一日に二回。これ等を私共は弔祭や追悼の意味するのであらうか。然らず、私共は如實にかの女を生活せしめつつありと信じてこれ等をなす。

形のある私自身は、日々に血の氣を涙に流して、命を枯燥せしめて行きながら、形の見えないかの女を生活させ成長させて行かうとしてゐる。普通の眼から見たら物狂ほしき振舞かも知れない。だが、かう信じかう行ふ以外私に何の生甲斐があらうか、私に何の恩返しがあらうか。また、私に何の望みがあらうか。私はかの女によつて生れ更らせられた人間である。愛と久遠のいのちとの關係を知らせられた人間である。その恩は深い。私はその恩返しに、世界で最も完成した女性を、かの女に於て成就せしめたい希望によつて、生の充實を味ひ得た人間である。この志念を今更どうしようもない。現實に於けるかの女と私とのよりよき再

會、この星一つのみが生死を貫いて私の行手を導く。

さみだれに埋れぬものよ瀬田の橋

この句は誰が吐いたのか、或は原句とは違つてゐるかも知れない。だがかの女が眠つた年の初夏の頃、茶室から庭に降る雨をみて、かういふ文句がしきりに私の胸に繰り返された。小止みなく降りしきる涙の長雨、私の肉體精神のすべてはそれに降り埋みながら、たつた一筋かの女との再會の望みばかり細長く、しかも執拗に私に架け渡されてゐる。雨沫の中の瀬田の橋のやうに。そしてまた庭に咲き移るかの女の遺愛の花々が、環境にほとんど感管を閉塞してゐる私に、季節々々を知らせるのも、別様の意味で埋れぬ瀬田の橋であつた。茶の間の先の早春の紅梅が散ると、湯殿の脇の墨染櫻が春の最中から晩春を告げる。次に池尻のあぢさゐの花、花畑の百合の花もやがて夏天の下に咲くであらう。蕾が見ゆる。かの女は筆を持つ童女のやうな丸い手をとめて、どんなにかなつかしい氣持で、これ等の季節々々の花を愛し眺めたことだらう。とき／＼は涙を眼に溜めて見てゐることがあつた。

季節が移り行く毎に、辛い溜息を吐く力さへ失ひ、死灰のやうな氣持になつて行く私自身が、あらためて苦笑をもつて顧みられた。

夢といふものが僅にうれしいもの一つだつた。夢の中に出て来るかの女は、ほとんど朗かで機嫌よいものばかりだつたので助つた。一度はかの女が丸々と肥えた健康さうな大きな赤ん坊になつて、田舎の畑の中に横はつてゐるのを見た。傍に親らしい人がゐて、私にこの子にキヤラメルを買つて興へよう、二錢五厘よこしなさいといつたと思ふと夢が覺めた。

私は機嫌よくなつた。かの子は今度田園の子として、健康一ぱいな人間として生れ更つたぞ。やがて旅行して地方を隈なく似寄りの子を探してみよう。だがさし當りキヤラメルを買ふ金を興へねばならない。しかしキヤラメルは十錢箱か五錢箱だらう。それを二錢五厘はをかしい。そこで私はどういふ註文にも嵌るやう、キヤラメルの十錢箱を買つて来てそれを靈前に供へ、なほ二錢五厘の銅貨も添へて置いた。何かしら供へものを持つて、とき／＼をばさんの靈前へおまゐりに来る姪御は、このキヤラメルと銅貨をみて聞ひ訊ねた。私はわけを話した。

姪御のうけ口はべそをかいて来て、うつ向くとはらく、涙をこぼした。

秋が來た。悲しみの底に届き、寂しさの底に届いた私は、勝手に秋になれと白々しい氣持でそれを迎へた。かの子の妹で嫁付いてゐる人がある。かの子は眠る前その家へとき／＼休

息に行くと、その妹夫人はかの子を亡母とも思つてかの子の足肩を撫で擦り、筆硯の勞苦を勞つたといふ關係の妹夫人である。その人から私へ慰問の手紙が來た。その中に、次のやうなことが書いてあつた。「お姉さまは歿くなられるまへ、よくわたくしにかういふことを仰られてでした。今の自分は實家の父母の間より生れたかの子ではない。岡本と私との間から生れたかの子であると——」私はこの文句を読んで始め何の意味か判らなかつたが、やがて鐘の音を骨の髓に打込まれたやうにびつくりした。かの子は自分を創生する力を持つてゐるのだ。

かの女は私のいのちの長所を探り、また自分のいのちの長所を探り、これを合せ纏つて出來上つた一箇の新しい人間として、出生したその自覺に達したのだつた。私が妻としてのみ思つてゐたかの女は、すでに妻であるかの女自身からも、良人である私からも脱却し、二人の間の娘として、その意味での二人のいのちを擔ひ、こゝに性格の豊富な一箇のみずくしい女性を創生したのでつた。かの女の晩年の性格の複雑さ、なる程さういふ事もあつたのか。

と氣付く途端に、私は鼠花火の一つが爆發するとたちまち連るものも爆發するやうに、愕きが愕きを爆發した。なんだその意味なら、私もまたこゝに自分を創生しなければならな

い。私も亦かの子と自分の間より生れた息子として、二人のいのちを擔つた新人であることから出發し始めなければならぬ。續いてまた自覺が爆發する。今ぞ私はさうある。私は悲壯と歡びの涙せきあへずして胸の中に叫ぶ。「母かの子よ。息子の私は今ぞ完全にあなたを擔ふ。二つではない一つだ」。私の机の傍に巴里のむす子の手紙がしじゅう置いてある。彼は母の眠後かういつて來た。

「僕の心の苦しみと修業は、八年間離れてゐたおかあさんと一體になる事でした。そして今度こそ完全におかあさんと一體になれました。おかあさんは、今、僕と共にあります——」むす子の太郎の方が、かの子と一體になることに於て、別離の苦を嘗めただけに私より先輩だつた。今こそむす子の體驗をも私は併せ得た。

こゝに於て、嘗て追悼會で宇野千代さんから聽いた、映畫の筋の、相愛の一人が命終ると、その相手の中へいのちを注ぎ入るといふことを受肯できる。けれどもその注ぎ入方は抽象的なものではない。私の望んだ如く極めて現實的である。

新生や創生や愉快ばかりのものではない。腐朽の私に、かの子の勁さや若き悩みがこみ入つて來るのである。私はその新鮮さ強烈さにきり／＼舞ひし、その苦しみに堪へず悲歎中

に週世さへ希つて果さなかつた過程さへある。多難ではあるがロマンチックな前途、そこにかの子は現實に脈々と生て行くであらう。私なるものは失せ、そして私はかの子としてこれから大に勉強しなければならぬ。

誕生

心に痛みどころのある身には、われならぬに、慈しみや思ひ遣りが出るものと見える。

この頃の暑さで急に増え出した蚊を見ると、二期生か三期生か知らないが、青つぼくて、ふにや／＼して小粒だ。女史はこんなのをふにや／＼さんといつて愛感をもつた。じつとするとすぐたかつて食ひ出すが、その幼稚生のやうな姿を見ると、私もほとけ心が起つて、打つ氣にもならず追ひ拂ふだけだ。けれども喰ひ去つた痕の、並の蚊より大きく腫れ擴がるのに、逃げ入つた闇を見て「こいつめが」と苦笑はするが、憎むほどの力はない。

私のかういふ氣持は人にも感ぜられるらしく、この氣持に聽して相應しい、哀れな話はよく聽かせられる。この間も多摩靈園へ墓參に行くと、石屋の老番頭が墓前心中の話をした。それは何でも北海道の、ある銀行の課長の未亡人と、その小さな女中とださうだ。この課長は

三年前に歿くなつて靈園の中に墓がある。生き残つた未亡人は子供が無いので、實母と聳を取つた姉のゐる、富裕な實家へ戻り、小女中一人使つて何不足なく暮し始めた。老番頭の見るところによるも快潤で、さう悩みを蓄へてるやうな婦人には見えなかつたさうだ。たゞこの未亡人は子供の代りに甥の面倒を見て、ゆく／＼は養子にでもするつもりだつたらしい。ところが、この甥が青年になつて夭死した。これがかなり未亡人の死の契機の一つになつたらしい。

未亡人と一しよに死んだ小女中は、その姉がやはり未亡人方の女中をしてゐて、いろ／＼未亡人に世話になり、嫁入り支度までされて嫁入りさして貰つたといふ。その恩義に感じて歿死したのだらうといふ。主従の女は良人であり主人である故人の墓前で世を果てた。

聞いたゞけでは、いやらしいところの無い哀れな主従心中で、これを心中といへるものかどうか知らないが、私は悲しみに牽かれて、この世を果てたといふ墓を尋ねお詣りした。課長一家の墓だけあつて、未亡人主従の墓はまだ出来てゐなかつた。石屋の老番頭はこの話をしてから、私の顔をじろりと見て「どうも三年目といふ奴がいけませんやうですな」といつた。ある雑誌社の記者である。彼はその妻を新婚後五年目に歿くした。その五年間はその記

者に取つて、いちばん生活が苦しい時代だつた。一枚として新妻に着物は買つて遣れず、楽しくあるべき一しよの散歩のときも、喫茶店に寄れば、たとへ飲みものを二杯づつ飲み度くなつても、金が無いため、一杯づつしか飲めなかつた。つまり新妻に一つとしていゝ目を見せず死なした。

記者はその後、生活はだいぶ楽になつた。しかし亡妻の事を思ふと怏々わうわうとして娛あそびます、かの女の寫眞をまつつて、前に飲みものを供へるときは必ず二杯を供へた。ボーナスを受取つたときはデパートへ行つて流行の着物を買ひ、これを妻の墓の傍を掘つて土中に埋めてやつた。寺から抗議が出てこれだけはやめた。「だがそんなことをしたつて、なか／＼遺憾の氣持は薄らぎはしませんぞ」その記者が原稿を受取にうちへ來ての話であつた。私は深く同情した。

ある晩餐の會の席で一人の文人が、彼の友人で愛妻を喪つたため病衰し、一年目のその月その日に歿した話をした。その文人は、石屋の老番頭がしたと同じやうに、私の顔をじろりと見て「君、一年目がどうもいかんやうだぜ」と。

ある製菓會社の若い課長だが、その美を愛して、早晚肺の病が起るのを覺悟で、一人の令嬢

を妻に貰ひ受けた。新妻は結婚後、二週間目に發病した。以來七年間、その看護に手を盡したが、つひこの間歿くなした。私はその七年間、良人である若き課長の至れり盡せりの看護と、身の持ち方の眞實を人傳てに聞いて、秘かに敬意を抱いてゐた。その課長は私の知人にも當るので弔意を表しに行つた。寫眞額があつたが、なる程散るを惜しまれるまだ若い美夫人だつた。

激しく撃つ諸行無常のおもひ、愛別離苦の悩み、人生の憂愁——さういふものを重く心に抱きながら、私はそのまゝやつとこせと生き上りつゝある。眠り去つたかの子女史が眠る前にいつた、たつたひとと言の言葉が力草となつて。

かの子女史は、わきに嫁いでゐる妹の夫人の家へ憩ひに行くのだが、後年に近くなつて、かういふことをしきりにいつて、妹夫人にいひ聞かせたといふ「現在の私は岡本と私との間に生れた子供なのよ」と。私はこのことを妹夫人より、姉を追懷する手紙を貰つたその中に、書き記してあるのを讀んで、奇妙なことをいつたものだと思ひはするが、なか／＼その意味は解せなかつた。四ヶ月あまり考へあぐねた末漸く判つた。

女史は自分に屬するものの中より、そのいのちの長所を探り、また自分の中よりもそのい

のちの長所を探り、これを父母として新しく誕生する術を、知つてゐたのだ。その結果の自覺に立つたのだ。女史のいふ事に絶対に嘘はない。

もしこれを可能とするなら、私も亦、せねばならない。私はかの子を母とし私を父として、こゝに新に生れ出る初子うづこであらねばならない。

こゝに亦かの子をも、現實に生誕せしむる術があるのだ。眞のいのちの流れの突き進みに會つては、生死覺睡の距ては策の目のやうなものだ、すう／＼間を透けて通る。

かの子は玉蜀黍とうもろこしが好きだつた。それが地方のファンからの贈物として届くと、腕白小僧のやうにせがんで、焼いて貰つて食べた。私はそれを好かない。けれども今は食べよう。かの子の生れ立てのむす子として。かの子のいのちを擔つてるむす子として、腕白小僧のやうに。相變らす諸行無常、愛別離苦の重き悩みを抱きながら、私はやつとこせと生き上りつつある。自ら顧みつつ曰くこれ何の心行ぞ。

さの字

寂しさに居るときよりも、寂しさより蘇り來るとき、その寂しさは一層寂しい。蘇らぬ前の寂しさは、まだ浸つてゐられる寂しさがある。蘇つた後の寂しさはこりや丸裸だ。寂しさ以上の風がすう／＼皮膚を吹く。物にもつてみるならば、寒中の水浴だらう。まだしも水に浸つてゐるときの方がましなのである。水から出て吹かれる寒風の切れ味、どうにも凌ぎのつけやうがない。

かの子女史眠り去つて八ヶ月間、孤枕涙雨。

まだ浸つてゐられる寂しさがあつた。つく／＼女史の信條を辿り返してみるのに、大乘の人は現實を中心とすると。逞しく生くべしと。

果して然らば、現實に逞しく生くることが、女史をしてなほわが上に生き續けしむる、唯

一の方圖であらねばならぬ。私は浸つてゐる寂しさを押し退けて、煩惱熾烈な俗塵の中に割つて入らねばならない。伴れもなく、一人、赤裸で紅焰の中へ踏み入る寂しさ。

毎年末、同情週間といふ企をやる新聞社の催しに隨喜して、私は何年の間か、暮毎に似顔畫揮毫といふ勞務を、寄附して來た。一昨年の年末のことであつた。一人の僧が來られた。彼は私に似顔畫を描かしめられた序に、僧の所屬の寺の事に就て語られた。確か南部七大寺の一、藥師寺だつたとおもふが、記憶に下手な畫家のことゆえ憶え違ひならば用捨を願ふとして、その寺では昔から葬式は一切受附けない相である。佛教は生きんが爲めの宗教であるからと。この事は、女史が一生口癖にいつてゐた、「あたしたちは藝術の決死隊よ。屍を踏み越へて行くのよ」に傍證を興へるものである。私はそれをも思ひ出した。

仕方ない立上らう。一人だけになつても、二人を一人で擔つて。このとき灼熱の鐵棒のやうなものが、心中に突上げて來て、從來冷灰のやうな殘軀と、水火鬪ひ始めた。

女史の生活の情熱が、私の鈍鉛のやうな身體にも、電氣のやうに傳り始めたのか、そもそも宗教的の回心とでもいふものか。私は女史が生涯吐き切れず、噛みく／＼んでゐたであらうと思はれる情熱の寂しさが、孤枕涙雨の寂しさに、新陳代謝して來る音を沸々身内に聞く。

その激しい寂しさ。人間はくづ折れて、へばつてゐるときの方がどのくらゐ樂か知れない。旅に出る勇氣と元氣ぐらゐ持たなくちやいけない。女史の知己故舊への挨拶めぐりの一つに、長野縣西筑摩郡田立村に禪院を構へて、行ひ澄してゐる、藤田嗽漣なる歌僧を訪ねる。これは女史が稀に持つてゐた、和歌の弟子の一人で、女史門下では同じく禪僧で、山形の佐木太道と並び數へられた高弟である。彼が追悼の歌の一つ

青山の電車通りの夕まぐれ暫しを佇ちて相わかれしか

この歌を讀むと、知友門弟には親身が纏綿として、長距離電話ならば大概五通話以上、人を電車道まで送つたならば、必ず電車の七八臺は通り過させて、相手と話し交さなければ相手を離さなかつた、女史の人なつこい倂が、髣髴として來る。

禪院は木曾川の谿谷を距てて、賤母の御料林に對する景勝の地に在る。頃は晩秋とて、滿山の紅葉はやゝ霜に消されて、寂光の色澤に落付いてゐる。由來、信州も岐阜縣寄りの方は景色が柔く潤つて、北信に較べると、南畫と北畫との相違がある。私は和められ、慙はせられる筈である。

黎明、五右衛門風呂をたてゝ呉れて、湯殿の窓を開け放つといひ呉れる。その湯に入りな

がら、木曾川が、錆び秋の連山の皺を潜り縫つて、中津川の方面へ展望を開かせて行く景色を眺めてゐる。嗽漣の弟子の小僧が撞く鐘の音に、曉は破られて行く。

本堂で勤行の聲が聞える。嗽漣が威儀正しい法衣姿で、本尊の前に女史の寫眞を据ゑ、觀音經を誦誦してゐるのだ。不思議な事に、女史は觀音を信仰してゐたが、弟子の嗽漣のこの寺も本尊は觀音である。女史の眠つた十八日といふ日は、世俗に觀音の日と稱されて特に禮讚供養が行はれる。従つて觀音供養は女史供養と日も一如する譯である。偶然や氣まぐれの多いやうに見えた女史のいのちの流れに、私は何か生命的に慧智なものが、祕在してゐるのではないかとさへ思はせられる。

この邊は季節とて小鳥が多く獲れる。その方を私はあまり嗜まないが、鯉こくは結構に頂戴する。田家の放養鯉だが、山國の清冽な水に洒されて川鯉のやうにすつきりと、しかも肉附は川鯉よりも厚い。栗、柿の名産地とて、椰子の實ほどの大柿は、露ごと枝から挽いで與へられ、また、菓子栗の栗まんぢうに、つぶし栗は充實してゐる。

寺の庫裡にも觀る、茶湯恭しくそしてこれ等の名産が、點心として慰めに供へられてゐる女史の寫眞を。私は眺めてつくづく考へる、都會文化女性の殊花のやうに見られてゐる女史

が、かゝる山中にて、質實に遺弟に侍かれ、靜かに逝く秋の風のそよぎに耳傾けてゐる。その寫眞のかの子は、醫者が嘗て戯れに「奥さんは頭の中の右側の方の脳味噌が、殊にも多いので」と評した、かの女の癖の、頭をやゝ右に傾けて、童女のやうな無心の態でゐながら、その瞳を思ひ据ゑてゐる。その深々とした眼ざしは秋の底にも徹つてゐよう。

寺よし、住持よし、景色よし。

歌漣の又の歌に

朝つゆの消ぬべきいのち我が師よりおのれいくばく保つなるべし

この心逝く環境に在つて、この心置きなき人に護られ、女史は少くとも歌漣の生きてゐる間は、山中冥想の業をこの遺弟に助けられ、奉侍せられ行くであらう。歌漣の歌はその奉侍の覺悟ともみる。

女史は幸福だなおもふ。眠前に一度なりと、この地を見せたかつたといふ氣持が、ちらりと心頭を掠めてすぐ消える。私は女史の眠りを通して、あまりにも人の逝く「死の世界」なるもの不思議と、睨み合つて來たので、それと「生の世界」とのけじめが、眼底に蘊眩しかけてゐる。比較して永い時間の生活なら、死中の生活もするぶん重んずべきものではな

いかとさへ考へる時がある。その永い方が幸福なら、朝つゆの束の間の方はちつとは勘定を負けてもいい。

女史のためにはかくも考へる。それでゐて、一方、私自身は彌が上にも、現實に思ひを凝らして生き貫くのを、女史の遺志のやうに迫られてゐる。女史が私の中に突き上げて來てから、私はするぶん矛盾の多くなつた自分を感じる。

女史は大矛盾の人であつた。だが、女史に於ては、矛盾の最後の分裂の危機には、必ずかの女の無限の愛性と、逞しい自己操持の良心とが働いて、それを速力的な團彈に纏めて行く。

唇を嚙んで「えい、いゝわ」首をやゝ後へ反らして「あたしや、嫌ですよ」また、髪も衣裳も振り亂して「パパウ〜」と童女のやうに、胸に縫つて泣き叫び出すそのときさへ、あれほどの迷ひの雲も、七花八裂も憚融し來つて、美事、決定的ないのち一途の三昧を、現出し來るのであつた。死も生もいかんともすべからざる、夢うつつ無き妙行人になれた。女史自らそれとしも覺えずして。天稟あれほど矛盾の苦惱を擔ふべく生み付けられた素質をして、どうやらそれを擔ひ運べたのは、また最後には、これを挺身統一する勇氣と生命力とを

興へられてゐた女史の天稟であらねばならぬ。女史にして始めてそれが出来る。天稟に恵まれてない私に於てはいかに。

晝日中は明るさに勇氣附けられ、私はやれるとおもふ。頼まれた晝紙など氣さくに筆を染めて、返し興へたりなどする。夜眠らんとして枕に就くと、山中の静けさ、笕の水の滴る音が氣の張りを抜く。一晚まんぢりともせず、早昧、はや起きて勤行に就かうとする嗽漣を呼び止める。

情けない聲を出して「どうだろ、藤田君。君、僕を一つ坊主にして呉れないか。もう、何もかも面倒臭い」。だが、嗽漣は小鼻に皺を寄せて笑つて「いえ、どうしまして、私には、先生を得度する力はございません」。慇懃に手をつかへてお辭儀をする。本堂へすーつと行つてしまふ。嗽漣が私を得度する力があるか無いか、そんなことは判るもんぢやない。しかし禪僧の折目正しさ、びたりと兩手を疊に當て、額を疊へつけてのお辭儀の慇懃さには、返す言葉はない。腕を拱いて「さうかなあ」といふだけである。そのうち陽が出て明るさが加はつて來ると、煩惱熾烈の眞つたゞ中へ單身斬り込んで行かうとする勇氣を、やゝ取戻して來る。鯉こくはうまく、晝も描く。だが、夜になつて枕につくと、笕の水音がまた氣を弱くする。

曉を待ち兼ねて、勤行に就く嗽漣の法衣の袖を控へ、また、情けない聲「とても駄目だよ。坊主にして呉れないかなア」すると嗽漣が小鼻に皺を寄せる笑ひ、得度の力なし云々、慇懃なるお辭儀、本堂へすーつ——前の朝の通りである。

物ごころつゝ時分から、風に心の傷み易く、何度、出離の志を抱いたか判らない。しかも何かに妨げられてゐる。ある點では、一役済したであらうところの、今度の私の身の上にするら、それが許されないとすれば、もはや私に隱逸は恵まれない運命である。勝手にしやがれ。私の中に、弱氣に抗ふ不逞のやけ力が、むく／＼と頭を擡げて來た。よろしい、では、及ばすながら泥まみれの現實へ、さらば一闘ひ侍らうか。序に、さびしさのさの字も、さけのさの字も同じ字だ。寂しさの道伴れに、ちと酒など飲んでみようか。

餘談ではあるが、私の頭の毛に就ての後日譚である。今年、二月の始めであつたか、元來その素質もあり、女史の藝事に對する好みを、踏襲して貰ふためのこともあり、地唄を習つて貰つてゐる女史の姪御嬢を、参考のため、ある清元の演奏會へ連れて行つた。食堂で茶を飲むとき、ゆくりなく洋畫家の小糸源太郎に會ふ。この仁は、われ／＼が美術學校入學前、藤島先生の塾で學んだ同門の誼がある。

彼は私の頭を指していふ「今も、會場の席の後から、高村君（彫刻家のか？）と話してたのだが、君の頭の毛が、年齢にしちやあんまり黒いので、染めてゐるのぢやないかつて……」私はこれに對し、「そんなケチなことはしないよ」と答へたが、いづくぞ知らん、この頭の毛なるものは、三月半ほど前、染めるにも染めないにも、問題外のくり／＼坊主になる運命にあつたことを。信濃の嗽漣坊の慇懃なお辭儀一つで、取り止められてゐるものであることを。しかし私はこの事實に對し、「悲劇と喜劇とは背中合せだ」とも「人生は膜一重」とも感慨する餘裕を持つて居らない。私は女史の眠前、私がへばつてしまつて何の弾みも無い精神肉體になつた場合も、たゞ文史が歡んで呉れて、「パ、は偉いのね」と、眼には感謝の涙を溜め、その圓な手を夢中で叩いて喝采するのを張合ひに、いかなる難事の仕事にも、むくむくと起きて立ち向へた、その軌道に眠後も沿ふて行くのを希ふのみである。女史が私に對し青春を望むうちは、私の好むと好まざるとに係らず、私の黒髪は濃く、天上の星は青いであるであらう。愛にこのくらゐの疏通力が無くてどうするものぞ。

同じさの字だ。寂しさの通伴れに、ちとさゝなど飲んでこまそ、と思ひ付いたのは、思案に刺つての元氣付けの方法だが、私に取つて約二十年來の禁戒を破ることももある。多少の

小氣味の良さと、感慨が無きにしもあらずである。殊に一昨年の春、肝臓が脹れたのを、二十年前の大酒の報ひと診斷され、もしこれが眞症なら、向ふ一ケ年ほどの壽命だと告げられて療養した。その肝臓の脹れは、詳しい診察ののち、眞症ではないとしても、用心するに之くはないと告げられてゐる。それを飲み始めることは、また、多少の危を好む心でない事はない。

李白は一斗詩百篇、——がんか落水水底に眠る。子供の頃うろ覚えの、飲中八仙歌を秘かに口誦くわうさみながら、嗽漣坊に送られ虎視耽々たんとくとして、木曾の谿たにの中から出ようとする。途中、上松町の有志が擁して、木曾は寢覺めの床の名所を見物させる。その眼覺めの床が瞰下かんかされる、崖上へ出ようとする道の兩角に、そばやが二軒向ひ合つてゐる。有志たちはその左角のそば屋でそばを食はせる。そば屋とはいひながら廣い明るい家である。小鳥や、松茸などの皿も出て、有志がまあ、お一つと猪口をさす。

一口飲んでみれば、色も香も昔さながらの酒である。二三合は左右なく飲めて、げいぶといふ氣持だ。そば屋を出て、寢覺めの床が瞰下される崖上へ出る烟道の兩側に、櫻の若木が並んでゐる。明澄な空氣と、暖くさし透す晩秋の陽の光りに、落葉まへの櫻の若木の葉は、

奈良漬のやうに甘く醗酵し、ほどよく黄に澱んで透き通つてゐる。その落葉まへの櫻の若木の葉のいろ。いつまでも忘れ得まい。

諏訪湖の岸に、柳の老木がある。世にもやはらかに、優しく枝を水にまで枝垂れさせて、朽葉まへの、錆びかけんとして派手な色の葉をつけてゐる。それが好もしくて急に汽車を降りて、その柳の葉かけの宿に宿を取つた。

その一夜の酒も忘れ得ぬものである。

これはまだ、酒に對する前衝戦に過ぎない。ほんとに飲むべくば、一つ姪御に相談して同意を得ねばなるまい。

女史の眠後、沮喪の私に對し、母とも妹ともなつて、勞り支へて呉れた唯一の女性はこの姪御である。この娘の勞りがなかつたら、私はどういふ風の糸の切れ目をしたか判らない。この恩義に對しても相談すべきものである。「をぢさんは、酒を飲み始めるぞ。どんな風か一つ見て置け」「仕方がないのね。でも氣の毒で、留められないわ」

大河口の河沿へのある料亭で、私は一人の旦那が酒宴を張る様子を姪御に見せる。やがて結婚するであらう姪御の、その良人がもし社交家ならば、かういふ様子をして交際すること

もあるのを、あらかじめ見せて置くと参考になると思つたので。そして、かういふ見學をさせ得られるのは、世故を経た苦勞人のをぢさんのみである。

私の遊んだ時代は二十三年前である。その遊び方は舊くて律儀だ。この大河口の料亭とて、私が七八年前、春陽會の會員だつた時分、その會の幹部が最眞にするので、連れられ二度來たのみの料亭である。私を覚えて上店て呉れたのが不思議なくらゐである。

老妓一、若妓一、雛妓一、私は昔風に、お座附の唄から始める。「まあ、お珍らしい。結構ですわ」と老妓はいふが、その老妓は、きよときよとと、人氣のある雛妓の意を迎へるのに、汲々としてゐるのに、今昔の感は深い。

姪御は、藝妓たちから懇に侍かれて御飯を食べ、これなら、世の噂の如く、家庭の妻が目への仇にするほどの人たちでもなしと思つてゐるらしい。老妓から「あなた、御結婚なすつたら、最初から旦那さまの胸倉に縫らないやうだつたら生涯取り付けやしませんわ」と、彼女等一流の情操教育を聞かされては、うたゝ眼を瞠つてゐる。あんまり遅くならぬうちにと、姪御を親元へ届ける。

酒を飲めば一升である。昔ながらの山櫻かなである。昔と違ふことは、さすがに酔が續く

ことである。家へ歸つて、着物も脱がず臥床に横はり、一晚中、同じうたを繰り返して唄つてゐることである。これを苦にして、家の中の唯一の仲間の男は、酔が早く醒めるやう濃い茶を仕立てては、二十杯も飲ませる相である。元來、茶は好きだから、その二十杯の濃い茶を飲み終へても、うたと酔ひは醒さぬ事である。その唄、

泣くな歎くな 日かげのもみぢ

泣いたからとて 陽はささぬ

女史が、自ら自分を慰めるときに、よく唄つた子守唄である。たぶん女史が、幼いとき聞き馴染んだ、郷里多摩川二子邊の子守唄であらう。

もう一つ、昔ながらの山櫻でないことは、一日飲むと、あくる日から當分飲まなくて済むことである。さる月、濱松へ晝を描きに行き、一夕飲んだが、その翌曉はばか／＼しくなつた。

それで有り合ふ紙に

どうだかと盃執ればもとの技倆

これぢや今更飲むに及ばじ

と自肅し去つて、しばらくは酒盃を顧みない。感心した濱松の人、これは頂いて、永く家寶にしますと持ち去つたが、そんなものになるか、どうかとおもふ。しばらくして二十日ほど経てば、別に何の理由もなしに、盃の一つも銜ませられる機会があれば、する／＼と一升へ滑り込む。

この頃は、ほとんど飲まずに過してゐる。想ひ起す、去年の春時分に、室伏高信居士と會食した席で、居士、私の顔色の憔悴を見て、親切と皮肉とをごつちやに混ぜ、彼の友人で愛妻の死に遇ひ、戀々たる切情から、一周年目のその月その日に、斃死した人の事を語つた。その口振り「おまへも、さうだぞ」といはぬ許りであつた。私にしてみれば、それでもいやうなもの、彼の著書ぢやあるまいし、高信の豫言に當て嵌るほどびなりとするのも業腹である。それでたとへ斃死するにしても、高信の口振りより、多少の時期の相違はありたいものだと思つてゐた。ところが、圖らずも一年目も過ぎて、身體の量目も一貫目ほど殖えてみれば、氣分の急迫を緩和した事に於て、少しはこれを酒のさの字の徳に歸していゝかも知れない。

しかし一方姪御にいはせると、

「をぢさんが、眞つ赤な茹で章魚のやうになつて、苦しさに唄をうたふとこ、見てゐても悲惨だわ。でせう」

である。女史眠り去つたのち、姪御のこの、「でせう」は相當、臟腑に響く。それで今は、飲むとも飲まないとも定めてゐない。蘇息し行く方は眞剣だ。

あの頃の美校

私たちが明治三十八年に美術學校へ入り、食堂に行く。薄くて、硬いから雪履の皮と呼んでゐるカツと飯で十五錢、これを取つて食べてゐるのもあれば、持參の辨當を開いてゐるものもある。だが食堂の中央の要部を占めては、汚い袴をつけた三四人の蓬頭書生が、お飯櫃をまん中にして飯茶碗を手に手に、よそつては食つてゐる。お菜といふのが丸のままの澤庵漬で、一人が端を嚙つてそこへ置くと、他のものが挟み上げてその次を嚙る。

ところで周囲の學生は、この一團に對し、ひそかに敬意と憧憬を抱くらしく、肅として遠慮勝ちに食べてゐる。訊いてみると、學校の近所に自炊生活をしてゐる、専科の畫學生たちで、晝は特にうまい連中なのだといふ。

彼等は食べ終ると、お飯櫃の中へ食器一切を投げ込み、それを一人が風呂敷包にして背中

に負ふや、手輕に運び去つた。この遣り口は、和田三造氏と及びその一黨が、元祖だともいひ、青山熊治氏等がそれだともいふ、傳説と共に、私たちは現にその末の流れを、目撃することが出来た。

磊落を装ふ、多少の氣取りもないとはいへまいが、なにしろこれを遣る連中は、代々畫がうまいといふことがはたに押しを利かせた。

時は明治三十八年、岡倉覺三氏が美校の校長を辭めて八年目、正木直彦氏がこの職に就いて五年目である。校風は少數天才教育型から、多數十人並教育型に移りつつ、まだいくらか餘波の起伏を示してゐた。

學校としての美術教育に、前の型がいゝのか後の型がいゝのか、この迷ひを見せたらしく、私たちは、前年度や後年度とは、違つた制度の入學試験を受けた。普通の年のは繪畫志望なら、畫の實技の試験だけを受ければいゝのだが、私たちのときは、まづ入學志望者は、假入學の名の下に、みんな入れてしまつて、三ヶ月教育した。日本畫、洋畫、彫刻の手ほどきを教へ、學科も加へた。かくて三ヶ月間の綜合成績をみて本當の入落を定めた。

この試験制度によつて入學した、私たちの級友の顔觸れを見ると、心なしか諸能融通する

やう發達して、食べはぐれは少い才人が多いやうだ。

新聞社の主事迄勤めた人もあるし、興行會社の舞臺裝置部を設定し、興行方策に與つてる人もある。日本畫へ移つた人もあるし、漫畫が二人出てゐるのも諸能融通の方であらう。何でもこなす藤田嗣治といふ級友などは諸能融通の旗頭かも知れない。

持まへの畫の方で、唯一獨脱の畫人は出てゐるかといふに、もしこれをいへば恨みつこになるし、いはねば卑怯にとれる。進退谷きんたいつたままに話を次へ移す。

小川なにがしは今どこにゐるであらうか。くた／＼の和服を着て煙管で刻みを喫ひ、木炭畫の消しゴム用に使ふ食パンの片れを、捻つては食ひ／＼して議論をする。

印象派時代に、中世紀風の陰鬱な畫を描くので、先生がたしなめると、話にならないといふ風に、わき空を仰いで、かんらくと笑つて先生を怒らせたものだが――

髯男達の思ひ出といふものは、肌目が粗くてさう好ましいものではない。まして私自身は整虫ちつちゅうの悶々時代であつた。出来るだけ懐しがるやうに努めてはみるが相當、無理があるのは已むを得ない。けれども當時の青春と美しき惱みと、このものは思ひ出てなつかしい以上に、私の心臓を動かす。あの恥かしいやうな、襲ひかゝり度いやうな、若き力は、今も勃然

と沸く。

偉大なる畫家にならう。——己の素質を辨へず、誇大妄想狂的に、うか／＼と、——まづ大體の生徒はかう考へてゐた事に間違ひはない。この考へをケシかけるのに先生や先輩の云爲があつた。

岩村透といふ先生は、英語や西洋美術史の講議をそつち除けに、「畫描きは親類一同から愛想をつかされるほど一徹な畫描き根性にならなくつちや——」。中村不折氏の言として「畫は米と違ふのだから、賣れるとは定つてゐない。畫描きは乞食になつても畫を描き續ける覺悟が要る」といつたとやらいふ事を、太平洋畫會系の生徒が持込んで來る。

これ等を聞いて私たちは興奮した。私たちの級友は四十名位あつたが、その中で卒業後の生活方針をつけ、萬全の策を執つてゐたのが、長谷川昇が今でもその天分を惜んで、時々話す魚津中學の先生になつてしまつたとかいふ、佐々木直哉といふ男の他、三人位だつたらう。

なぜそれが判るかといふと、當時、學校では隨意科として希望者に師範教育を授け、修了者には中等教員の免狀を與へた。級友中三四名のものは、一週三四時間ぐらゐだらうがそれへ

行く。ところがその行き方が妙だ。「おい、これからどこへ行くんだ」と訊くと、その者は「なちよつと、その」と胡魔化して、決して、生活のため教員資格を取る支度をしに行くといふ氣は、微塵も見せない。仲間に輕蔑されるのを知つてゐるから。

三つ子の魂百までといふ。もう彼の娘さんたちも立派に嫁付いたのだから、話してもいいだらう、一つ田中良の事を話す。この男は學校時代に、今日アカデミシヤンの範疇ともいふべき、田邊至と並んで、特待生にまでなつた男だが、早婚で學校時分すでに妻が定まつてゐた。私たちは級友中唯一のワイフとしてよく見に行つたものだが、これが卒業して三人の美しい娘を生んだ。

彼は卒業後生活や家長の責任を感じる。そこで彼は挿繪や舞臺裝置——舞臺裝置は金にはならぬと彼はいつてゐるが、でも中には商品切手ぐらゐにはなるのもあつたらう——で稼ぐ。しかし元來、彼の志は、前述の生徒全體の夢である偉大なる畫家に在つた。そして難儀なことに、偉大なる畫家は官展に出品するに在りと彼は考へてゐた。

出品はしたし、稼ぐに忙しし。「三人の娘たちを、嫁付けたら、大いにやるよ」私は二十有餘年間の交際があるが、彼に逢ふ度びにこの辯疏を聞いた。恰も私が官展出品の勧誘者でも

あるやうに。

ところが三人の美しい娘は嫁付いた。私は數寄屋橋の更科で、新夫人になつたその末の娘さんが、新郎と質素に仲好く、おそばでお晝飯を濟してゐるのを見かけて、こりや世帯持もよささうだと祝福したものだ、父親の官展の出品は未だに見かけない。

今は三人の新夫人たちに呼かける。「あなた方の若さをもつておとうさまを蘇らせなさい。それが孝行ですぞ。おとうさまの生涯の夢は實にこれに在るのですぞ」と。

洋畫壇の大きな流れからいふと、舶來の印象派で保つた白馬會派と、在野國産洋畫の太平洋畫會とを、合糅して官展の第二部に纏められた時代である。白馬會派の頭目で政治家の黒田清輝氏の手腕らしい。その官展は、私たちが在學三年級の歳に、文展といふ名で第一回が開かれた。

學校の西洋畫科主任の黒田清輝氏は、教授を和田、藤島、長原諸氏に任せて減多に來なかつた。來るときは太鼓腹に瀟洒とした洋服か、派手な和服であつた。いつも取巻きの弟子を二三人従へ、畫をみて廻つたあと、特別入學の混血兒嬢とフランス語で談笑した。これを生徒たちはいかに好もしき眼で眺めたことか。

生徒たちは氏をメートルと呼んで畏敬してゐた。上級生の話によると、もし生徒がそのパレットに、煙脂氣や墨氣の繪の具を備へる場合には、氏は生徒の筆を執り、黙つてピツとそれを除き捨てたといふ。明朗原色七彩主義の畫家としては當然であらう。

私は、氏の持つ畫中の詩にはぞつこん惚れてゐた。氏の持つそれは、原地フランス同派の大家マネー、モネー等に較べて、東洋的な韻致を加味するが故に、竿頭一步を進めてゐると考へる。しかし氏の明朗原色七彩主義と、何んとなく人を壓迫する人體電氣とは反撥した。

私は學校入門までに、墨仕立の邦畫の修業で、骨まで燻されてゐた。

育ちは、襦袍を着て四海を睥睨できないまでも、東京下町の四五區は睥睨した、町の畫家の俸である。お邸風の門構へとは肌合ひが合はない。しかし、かく事をさかしらに言ふと雖も、結局は物の數ならぬ弟子生徒である。

一度反噬してみたら先生はいつた、「僕の教へ方が氣に入らなけりや退學するより仕方なからう」「退學しませう」流石に涙が滾れた。すると先生も少し周章で「ま、も少し考へるより仕方がなからう」といひ方を誤魔化して呉れた。

自分の事を喋々するやうで恐れ入るが、右は卑近の一例として取出した。この時分は師弟

よく畫の上で喧嘩した。そして一度喧嘩した師弟は、大概あとは親密に結び付くとされてゐた。

畫さへうまけりやといふ頭が離れないので、學科を粗末にしてしようがない。近藤浩一路などは、用器畫の試験に、コンパスも烏口も持つて來ない。毛筆を懸腕直筆に構へ俳畫染みた用器畫を描いた。曰く「感じが出てゐる」

カフェーも茶房もない當時は、上野山下の青陽樓といふ洋食店が飲み場所であつた。前を通ると女中たちは雑巾がけの手を振つて「藤田さん、田中さん、長谷川さん、近藤さん、岡本さん寄つてらつしやい——」一人通つても連帶責任的に呼ぶ。金が無いときは根津の椎茸めし、飯十錢酒十錢。

なつかしい當時の勉強と鬱屈と、學校圖書室にかかつてゐた乾山の鯨の繪。この趣は同時代、谷一つ距てた根津に假寓をしてゐて、情熱の振幅しんぱくを等しくしたかの子女史の歌に手傳つて貰ふ。

ほろ／＼と涙あふれぬあふれ來る若き力の抑へかねつも

亡き妻と共に生きつゝ

かの子が眠り去つて一年と少し経つた。この一年餘の間に、かの女と私との世の中の棲み方の進化を、あらまし先にざつと述べて、それから一々あの段階に移り少し委しく述べよう。最初は、かの子の眠前の信條の、いつも現實を中心とする、といふ意味により、再びこの世に生れ更つて來るか女に、いつかどこかで屹度、會へると思つてゐた。

次に、その再會は輝かしい希望になるが、現在、姿も見えず聲も聞かれぬ寂しさ、頼りなさ、これを一體どうしたらいいのか、これで二人が現實に生きてるといはれるか、と疑つて來た。

いかなる物にも、いかなる事にも距てられない、二人の生き方はないかと求めて來た。去年の二月下旬、寒雨を降る日、かの女の柩、多磨靈園に埋めた。

かの女の愛してゐた武藏野の壤土を、深々と掘り窪めた底へ、しづ／＼と卸し下げられて行く白木の柩、私はあらかじめ、穴の底に時の花、温室の花こき混せて厚く敷いた。今や卸し下げられて行く柩の上にも、厚く投げ並べる。五彩の上被と、五彩の下被の間に挟まつて、柩は花のサンドキツチ。

花のサンドキツチは、馥郁とした芳香を放ちながら、私が鐵匙で掬ひ落す土を冠つて行く。

これを見てゐた世話役の石屋の番頭さん、「へえ、昔からお棺の上へ投げ花をなさるのはよくありますが、上下に花をお敷きになるのは始てです。こりや結構なお思ひ付きですな。他の方に教へてあげませう」と。

結構なお思ひ付きかどうかは知らない。結構なお思ひ付としたなら、あまりに惨ましい結構な思ひ付きであつた。かの女がいくら平常、愛してゐた土地の土にもせよ、たとへかの女の生命が脱ぎ捨てたものの、入つてゐる柩にせよ、この寒空に、この土に、柩の肌をぢかに當てられようか。土に肌が馴染むまで、花よ、しばらく菌糸ともなつて覆つてゐてやつて呉れ。この遣る瀬なさから出た、せめてもの趣向が、この惨ましい結構な思ひ付きに現れた

のである。かの子は實に花が好きであつた。

多磨靈園は墓地と思へぬほど廣くて朗だ。

だが寒雨に濡れながら、その花の柩が、土に覆はれて見えなくなつて行くときの氣持。

「ああ、何で人生にはこんな酷い出来事が構へられてあるんだ」「何に向つてこの酷い氣持を訴へたらいいのだ」「俺はどうしたらいいのだ」

かの女の性格、信條、修養を知悉してゐる積りの私は、かの女のいはゆる終焉に會つても、かの女は死んだのではない、眠つたのだ。覺めて來たとき屹度また會へる。この信念を執つて動かない。人にもテ、れることなく話して來た。だが信念は信念だ、情緒や感覺といふものは、さう氣の強いものではない。ひどい揺れ動かし方や、觸れ方に遭ふと、このもの等は震へよるめき信念まで共倒れさせさうになる。信念まで、共倒れになりさうになつた事は、一年餘後の今日迄、度々ある。さうしてこの墓地の柩送りのときはすむぶん、ひどい衝撃の一つであつた。

女史の訃を聞き、急いでこの墓地にお詣りに駆けつけた一人に、女史の和歌の高弟で、信州に禪寺を持つてゐる藤田啖漣君といふのがある。感傷の餘り、信州の寺を出るときから、

再び寺へ歸るまで、汽車中はもちろん、泣き詰めに泣き、そして東京へ足を踏み入れても、墓地と私の家とへ寄つただけ、寄つても、嗚咽の聲で口が利けず、私と手を握つただけで、すぐ辭して歸つて行つた人なのだが、その人が數多く贈つて呉れた哀悼の歌の中に、

得給ひし永久の生命のみ光りも現つにみねばかなしきものを

といふのがある。私はこれを読み、人も同じ想ひに居るものかなと、感じたことであつた。

この藤田啾漣君、少々あわて者で、自分は信州に住んでゐるため、東京近くの師の墓へは思ふやうに詣れぬのを遺憾に思ひ、女史の墓の垣根が、沈丁花の木で圍つてあると見て取り自分の寺の庭へも沈丁花の木を植ゑて、せめてこの花の木を通して、志が運べるやうにと念願を起した。彼はそれを植ゑた。ところが女史の墓の垣根を、沈丁花と見たのは、啾漣君のあわてた誤りで、事實は正木であつた。私はこの誤りを知つたので、特に沈丁花を三株、墓地内に植ゑ、啾漣君の寺の庭のそれと照應するやうにした。この程の手紙によると、啾漣君の沈丁花も、墓地の沈丁花に、さほど季節を前後することなく、花の蕾をつけてゐるやうである。

いぢらしい、かういふ少しの喜劇をも混へながら、墓地の土は落付き、私が書いた墓標の文字は古りて行く。辛くて仰ぎ見られなかつた墓道の櫻の満開、溜息が誘ひ出される炎天下の蟬しぐれ、私は女史がいはゆる終焉の日である、十八日の八の字に因む日には、大概お詣りをした。

墓地の土は落付き、墓標の文字は古りて行く。

とき／＼は感傷の氣分から、信念も共倒れになりさうになりながら、また、沈丁花事件のやうな、いぢらしい喜劇に微笑しながら、墓地の土は落付くにつれ、墓標の文字は古り行くにつれ、私の中なるかの子は結局は、生き勝つて行くのであつた。

八の字に因む、月に三度もの墓參は止められない。しかし、これがどうしたといふのだ。かの子は、私と一しよに家から出て、私と一しよに家へ歸つて來るのぢやないか。かの子が純真な心を通して愛し取つた、各方面の人々、——それをかの女は、自分の領地とか分身とかいつてゐるのだが——その中にもかの女はもちろん生きてゐる。偉い人の中には偉い方面のかの女が、優れた人の中には優れた方面のかの女が生きてゐやう。私はこれを嬉しいことに思ふ。しかし、何ものの覆ひも除き去つて、一ばん女の痴愚に歸つて嘆き絶り、また、私

の痴愚に向けては、超人間的な慈しみや愍みで包み生し、人間の弱點と弱點とを飾るところなく持寄ることに於て、そこに却つて人間の高貴性を見出した相手同志は、貧弱な私ではなかつたか。

想ひ起す。かの女はある日、私に一枚の似顔畫を描いて呉れとせがんだことがある。それは、かの女の友人からかの女が頼まれて來たもので、かの女はそれを私に描かしめなければならぬ好意と義理を、その女の友人に持つてゐた。だが、その註文はまた、難かしいものであつた。似顔畫の據りどころになる、本人の顔も私は知らず、寫真もないのである。「そんな、ばかな。雲を掴むやうなことで、似顔が描けるかよ。寫真ぐらゐ持つて來なよ」私はいつた。だが、かの女は承知しないのである。「そんなことしてちや、雑誌の締切に間に合はないのよ。いま、すぐに要るのよ」それから「バ、ぐらゐの人なら屹度、描けると思つて引受けて來たのよ。だから描いてよ」

この童女のやうな無理と信頼。私はかの女が口で語る、その女の友人の僅かばかりの顔の特徴を聞いて、これを根據に畫を描いた。こんなことは在り得べからざる事だ。もし頼み手がかの女で無かつたら、私は一笑に附して、いかなる向きからの註文でももちろん斷つた。

かの女の註文の似顔畫は、當て推量に十二三枚描き試みるうち、幸ひ一枚それらしいのが出來た。全くまぐれ當りである。けれども、かの女は、それが當然、私の、技倆の結果であるかのやう、その一枚を取り上げ「よく出來たわ。似ててこの通り。だからあたしや、バ、には描けると思つてたんだわ」いそ／＼として立去つた。

私はかの女が立去つたあとで苦笑したが、苦笑しながら熱い涙が頬を傳はつて來て仕方がない。かの女は自分を無理な女と、私に思ひ取られる懸念なぞ一塵も心に混へず、何でも自分の希ふことなら、私が絶対に許し容れて呉れると安心し切つてゐる女。畫ならいかなる畫でも、こなし切れると私を信じ切つてゐる女。天下にこれほどの信頼はまたとあり得まい。私は、始め無理をせがんでケンからんと、胸を掠めた非難の念を恥かしく思ひ、かの女によつて自分が高められ、淨められる氣がした。

墓へ往き來の氣持は、だいぶ變つて來た。墓はかの女の生命が脱ぎ捨てたものを、記念に納めて置くところ。脱ぎ捨てたものにして、かの女がいはゆる生涯に、愛惜し重用し、また、私たちが、それによつて、かの女をかの女として認め親しんだもの。それが納められてあるところだから、敬意と愛慕はもとより自然に注ぎ向けられる。けれどもかの子の生命は、斷

じて土に埋れるものではない。どこかに生き續けてゐる。この信念はいく度びかの試煉を経て、追々揺り据ゑられて来る。そして、はじめ観念的だつたものが、だん／＼體驗と實感に立證されて来る。

かの子の廣大な生命は、かの女のいはゆる他の領土、分身にも生き榮えて行つてゐるだらう。けれども私に取つては、私自身の中に、最も勁く逞しく生きつつあるのを、偽るわけにはゆかない。バ、嫌ですよ、こんなところに一人ぼつち置いてつちや。あたしや、バ、としよに歸りますよ」墓地への行きしなにはそれほどでもないが、歸りには屹度、かういふかの女の聲が聲える。私の心の中に。そこで私はかの女を胸の中に抱いて歸るのだつた。

「カチ坊（かの女の家庭内に於ける愛稱）、君はたいへんな芝居を打つたな。死といふ芝居を。それは本もののやうに見える。だが、君は死なんてえものは、一度も寄せ付けはしなかつた。現に僕と共に、こんなにはつきり生きてゐる。そしてその芝居の名残を、今僕ととしよに眺めてゐる。だが、この芝居はあんまり深刻過ぎて、僕には堪へ切れないほどの刺戟だつたよ。カチ坊、君はひでえ奴だよ」私は胸の中で私語する。すると、かの女が「落付いた。バが、泣いて周章たの。愉快だわね」愉快さうな笑ひ聲と、丸い小さい手がパチ／＼拍手す

る音が聞える。

「慕詣りはカチ坊との假りの忍び逢ひさ。一しよに家にばかりゐて飽き／＼するから、あすこの武藏野の景色のいゝところへ出張つて、忍び逢ひするのさ」私は近親にこんなことを語る。私の慕詣りはだいぶ陽氣になつて來た。端なく思ひ返される二月の寒雨の日に土に埋めた、五彩の花を上被と下被にした、かの女の柩を。それは十七世紀のスペイン畫家ムリリヨの「マリアの誕生」の繪のやうに、優しく柔く移されたのであらう。ムリリヨの繪に於ては、天使がそれを擔ひ移して天界へ行く。かの女の柩に在つては、五彩の花が五彩さながらの雲となつて運び來る。私の明るみかけた胸の中へ。

世の常には、かの女が逝つたとするその死の世界を通して、私はかの女の在所を求め、私のかの女と語り交はすことに慣れて來た。私に、いはゆるこの世とあの世との境の距てが、曖昧になつて來た。これほど鮮明に、いよ／＼生勝り行くかの女の棲家が、死の世界と唱へられる世界とするなら、死の世界も現實である。たとへ生きてゐるつもりでも、朦朧とした意識で過すなら、この世も非現實な所である。夢か現か。

うつし世を夢まぼろしと思へども百合あか／＼と咲きにけるかも

かの女は物ころつく時分から、傷み易い性格から、また人生の悩みと愛により、現実なるものの凝視を餘儀なくさせられ、その結果、百合あか／＼と咲く永遠の生命の世界を、把握することに於て、この世をもあの世をも、夢まぼろしと觀じ去つた。すなはちこの歌があつた。虚妄のものは去つて一眞實のみある。うつし世とは普通この世のことを指すが、これは歌道上傳統の修辭を採り上げて使つただけで、生死共に、赤百合があか／＼と咲かざる非單的混濁の世界ならば、夢まぼろしである。この歌にはなほ幾つもの解釋があるが、かの女は十數年前、この歌を詠んだ時分から、生死共に夢幻と觀じ去り、しかも、この生死の世界を貫いて生死に妨げられざる、眞に生き續くる道のあるのを、體驗把握してゐたのであつた。百合はあか／＼と咲いてる道である。赤い百合が咲いてる道といふのではない。赤い百合は、偽りなく、濁らざる性の天然によるが故に、あか／＼と咲く。その切實性、素直さ、純粹性を百合によつて象徴したのである。同じものを人の上に求むるなら、まごころであるであらう。かの女自身矛盾多く、幼稚迂濶も隨分あつた女だ。だが、愛の濃さと深さと、まごころに於ては生れ付きに凄いものを持つてゐた。かの女が人生の果敢なさや不信に出遭ひ、いかなる力を頼めなくなつても、たゞ一筋、かの女のこの長所にだけは信賴が置けた。ます

ますこの長所に、生の夢も死のまぼろしも、穿ち行く生命の永遠性を見出して行つた。愛の濃さと深さによつて燃焼するまごころの世界、これこそ現實中にも最現實なるもの。それは死をも蘇らす。

話は少し難しくなつたが、このくらゐの事は述べて置かないと、私の今のかの女と共なる生き方が、單にセンチメンタルから出た心宥めの世迷言にも取れよう。それでも關はないが、人に向つて述べる以上、親切が足りないやうに思へるので努めて述べた。

「私のかの女と永遠に一しよに生きよう。離れまい」この生一本の一本槍。これで何もかも私に於て問題解決だ。かの女と私は、形はどういふ形を採らせられようが、あの世この世の容れ物を違はせられようが、二つの生命は簾越しの水のやうに、すう／＼漉して一つになる。また、私たちの都合によつては相生の松のやうに、元根は一つでありながら、二た枝に枝を分つて、目出度く見返り合ふこともあらふ。

あに、二枝のみならんやである。歐洲戰亂下の巴里に踏止まり、勉學を續けてゐる、かの女に取つても私に取つても、唯一愛惜のむす子、太郎も、永遠に一しよに生きて離れない仲間、私は取入れてある。それゆゑ、戰亂が勃發した際も、私が彼に送つた手紙は簡單だつ

た、「お互ひにどうならうと、俺れは永遠におまへと共に在りおまへを護るぞ」といふ意味のものだつた。歸朝畫家宮本三郎氏が、新聞に載せたところの消息談によると、むす子は防毒マスクを傍に「部屋の硝子窓に大きな美人畫など張つて、悠々と」勉強してるといふことだから、父の志は通じたのであらう。母の計の直後「これからは完全にお母さんと共に在りませう」と書いて寄越して、私を激励した彼は、この點にかけては私より先輩である。

あに、また、むす子のみならんやである。私は、かの女の遺志と思はれることを執り行ふに當り、それに携つて貰へる人の上に就ても、同じ思ひは去らない。素質のあるまま、かの女の藝事への執着を踏襲して、地唄を習つて貰つてゐる姪御や、その他の人の上にも、この護念なくして、成功成就さす事は難かしいと感じてゐる。

もう、この頃では、女史のことは思ひ熟し、思ひこなし、思ひ貫き、一しよにゐるといふより、私自身の分子はだん／＼薄くなつて、女史の性格の分子が少しづつ入り込んで来るやうだ。

一ばん著しくそれが感じられるのは、一たい私は、悲哀だとか、哀愁だとかいふ感じのもの、相當、甘味の加はつたもの、假りにこれを果ものにすれば、ボンカン程度の酸味でな

ければ食べ得ない性格だ。それに引かへ女史は、噛んで身震ひが出るほどの酸味、例へば生梅、柑子たちばなのみほどの悲哀、哀愁でなければ承知出来ない。ところが、私もこの頃はそろ／＼生梅、柑子たちばなのみの悲愁に堪へられるやうになつた。暢氣のしやな私に、かの女の迫つた情熱家のところが出來て來た。かの女の悩みと、若さと、華やき——お、私に突上げて來るかの子よ、私はそれを引受けるが、どうか私に堪へられる程度に、徐々にして呉れ。私はおまへほど、勁くも勇しくもない人間だ。

浅草見物

こどもの時から東京に育つたので、浅草は親しいものの一つである。鳩ぽつぽに豆をやつて、江川、青木一座の玉乗りを見て、萬盛庵で玉子焼を食べる。このコースは、こどもの私たちに取つて、至樂の一日とされた。「さあ、浅草へ行きませう」この言葉は、私たちがいそいとさした。老いよる波、無精な床に、のつたり反つたりして、寢覺め勝ちな短夜を明すこの頃でも、浅草の噂を聞くといそくとする。但、そのいそくは空廻りのいそくらしく、事實、浅草へ行つてみると、一ばん長く足を佇めてゐるのは、觀音堂うしろの銀杏の大樹である。

數幹あるが、鬱青の色、愁ひを涼ませる。九代目團十郎の「暫」の銅像はあつても、山中仙寰の氣を感じる。さればといつて、足をこゝに停めただけで、踵をめぐらし歸るにも非ず、やがて靴先を踏み出して、結局六區の賑かさに流れ込むところをみると、空廻りだけだと思つたそのいそくに、幼時の多少の根が、残つてゐないこともないのである。

今年の早春、わが家に不幸があつた。私は身動きもせず、うす黝く蹲つてゐた。これを然るべからずとして、川端康成氏夫妻が根岸の里の邊で、一夕の清餐を饗して下さつた。餐罷んで川端氏は「どうです、浅草へでも行つてみますか」といつて下さつた。川端氏は人も知る如く小説「浅草紅團」によつて浅草の造詣を示し、浅草の新面目を紹介した作家である。時は恰も、氏がこの小説を作したときよりは程遠く、氏はすでに、浅草に對する興味は、薄らいでゐると思へるのに、かく從憑されるのは、ひたすら私への親切であつて、この刺戟の巷が、私に、いくらかの慰め草にならうも知れぬと、思はれたからであるらしい。

その食事の席の窓から、夜空に映る浅草の灯が見えたが、それを眺めながら私は手を振つてお断りした。「とても、いまは駄目です。行く氣になれません」

川端氏は憫むやうに微笑してゐられた。

それからしばらく経つて私の知れる、菓子を作る會社の社員で、社内の接待主任を勤める人が「淺草へ行つてみませんか、面白い喜歌劇役者がゐますよ」と誘つて呉れた。どうやら少しばかり、慰安の刺戟にも、堪へられるやうになつて來てゐた私は、伴ひ行かれた。

この會社のみならず、商賣の性質によるある種の會社には、なか／＼趣味の多い人がゐる。地方に赴任してゐる支店長などが、たま／＼上京して來ると、「何か變つたものはないか、東京で珍らしいものはないか」と要求する。さるトビツクによつて首都の新形相を、みやげとして一掴みに、掴み歸らうとする魂膽なのでもあらう。これに對し、それゆゑ接待主任は日頃、何か見付けて置くのを怠るわけにはゆかぬ。

この接待主任に導かれて、私ははじめて清水金一氏の藝を見た。無條件に面白かつた。素人の生なところを、勇しく怜悯にうち出して活々してゐる。玄人でこれを失はないものは天才である。この接待主任にとつて、この俳優は別に珍しい近頃の發見でもないし、その前からオペラ館は永井荷風氏が最眞にして、しよつちゆう行つてる小屋だと聞くからに、永井氏もこの俳優を早くも認めてゐたであらう。より敏い淺草常連の人たちには、一層舊くから知遇に値した俳優であるであらう。それを私が今更恭悦がるのは、迂遠に定まつてゐるが、面

白いからには、さればといつて、私だけに取つても、捨て置けない。迂遠は覺悟で人にも喋り見物にも行つた。雑誌「話」で、曾我廼家五郎氏と私の對談會が企てられた際も、私はこの喜劇界の長老に向ひ、臆面なく清水氏の事を語つたところ、五郎氏はまだ見ないといふので、一見を勧めて置いたものだが。

清水氏に困つたところは、よく小屋を休むことであつた。多分その頃一時だけの事であらう。だが折角あてにして山の手から遙々見物に行くのに、すつぽかされるのは甚だ面白くない。さうかうしてゐるうち清水氏は淺草を抜けて東寶に入つた。榮進には違ひなからうが淺草に取つては寂しい。この頃、氏主演の映畫の處女作「豪傑人形」を見たが、未だ氏を活し切つてゐない。しかし一方にエノケン、一方にロッパと、この兩傑を控へたオペレッタ界に打つて出で、一つの旗幟を立てるのは、やはりこの人のやうな氣がする。どこが取得か。大略前行に申した事だが、素人的の木地を保管し、それに興味なるものを快速に簡約して、スポーツ的な韻律で訴へることである。律儀で書生風で感覺が新しい。たゞいかにも藝風が單純で種類が少い。工夫を要するところだ。

とにかく清水氏はゐなくなつても、オペラ館なるものは存在に値する。これに、もしもつ

とアクロバチックとか、軽口掛合とか、個々の藝人を變化に加へたら、巴里、ゲーテ街のポピノ座の存在に似通つて来る。この座はこれから認められやうとする新人と、もはや老境に入つて悟り切つた老藝人とが、渾然融合して一つの座風を形造つてゐた。渾然融合してゐるのは藝人間ばかりではない。舞臺と観客席とが長屋交際つきあひひのやうに融合してゐる。會興の波が見舞ふとき、期せずして観客と舞臺歌手とは、恍惚の合唱に高揚する。

オペラ館の薄暗い二階に蹲つてゐると、隣の席の、印半纏にパンツ、セーターに半股引といふやうな観客が、アイスクリームの麩のコップを食ひ嚙りながら、舞臺で唄はれつつある歌謡のメロデーを品し、舞踊のタクトを評するに頗る肯綮こんけいを得てゐるに感嘆することがある。

この座には、なほ丸山和歌子女史が在つて、族長型の母性をもつて観客を、息子か甥のやうに操縦するのを見るのも面白い。

私は、この稿の委嘱を受けてから、一日の暇を作つて浅草を涉獵してみた。以下、私の思ひ出と照合した見聞記である。

吾妻橋近き神谷バーへ入つてみる。客は相變らず、蹄鐵型のスタンドのまはりに、ぎつし

り並んで飲んでゐる。三十年以前の畫學生時代、金が無くて、早く酔ひの能率を上げようとする場合には、この店の名物電氣ブランを飲んだものだが、今はどうあらう。試みにそれと生ビールを一杯とつてみた。今は老いの口に強くてとても飲めない。生ビールだけを飲んだ。両方で三十五錢だつたから、今も安い店に違ひない。一皿八錢の冷やつことか、さらし鯨の酔みそ、とかいふ夏向きの酒の肴で、このブランのコップを干し開けて、おもむろに扇を使ひながら、隣人と愉快さうに話してゐる客が大ぶある。相變らずやつてるなと微笑まれる。それにしても、客の服装も店附も高級になつたものだ。店附は壯嚴になつて、ちよつとカソリックの禮拜堂の感じさへする。

女連れの酒飲みは、二三軒先のきんつば名物の菓子舗、あづまやへ女だけを送り込み、みつ豆を食はせといひ、自分は神谷バーでねばるといふ寸法らしいが、あづまやへ入つてみると、棚に材料品の桃の罐詰や、オレンヂの罐詰が積上げてあつて、さすがに浅草は、食ひものが豊富だと思はせられる。

雷門へかかると、浅草みやげ紅梅焼、雷おこしの店が例の如くある。もとはこゝの店の娘たちは、島田や桃割れに結び、派手な前垂れ掛けで、紅梅焼を焼いたり、おこしを袋に詰め

たりした。その看板娘に惚れた畫學生の友人があつて、畫の稽古中、畫掃毛でパレットを叩いて、紅梅焼を焼く音を真似て、面影を偲ぶのでうるさかつたが、今は店の娘たちは事務服になつてゐる。

仲店の賣店も、變らぬといへば變らぬと見え、變つたといへば變つたともいへる。なにしろ徐々に變つて、とき／＼氣をつければ、はあさうかなと思へるのだから、どつちともいへる。日光唐辛子や、大阪の鹽昆布などを曲ものに入れて、土産ものに賣る店がいつもの通り三四軒見えたが、いつこれ等を淺草名物に取入れたのであらう。もつとも淺草名物といひながら、淺草で採れるものは、二百年以前、淺草川で採れたといふ、淺草海苔以外何一つ無いのだから、何でも採つてもつて藥籠中のものにするがよからう。

煉瓦通りから横へ切れ込む角に、反ものセリ賣りが出てゐる。賣品を誇示して、「スフもあまり入り過ぎたのは、却つて爲めによくないといふ村岡花子さん、阿部ツヤさんの御説で——」これが本當に、村岡女史や阿部女史の、發言に關るかどうかを知らないが、とにかく淺草のセリ賣屋さんも、かういふ人名を口にする程度に、ジャーナリズムに關心を持つてゐる。

仁王門を入つた右手五重塔前の空地で、棒頭に石の塊りを括りつけたのを、地上に立て、木剣を提げて人を集めてゐる路上業者がかういつてゐる。「獨逸は斷乎として闘ふからこれを獨斷といふ。佛蘭西は負けて退いてだん／＼影が薄くなるから、これを佛壇といふ——」獨斷のモヂリ方はどうかと思ふが、佛壇の方は當り相になつて來る氣配が見える。今日、大道業者も、新聞のニュースはなか／＼よく讀むものと見える。

觀音堂左、こどもがザリ蟹を賣つてゐる。小池の石橋を渡つて、淡島さまの境内を通り抜ける。八ツ手の木の枝に、縁談の御籤を頂いたのちの籤鼓を、たくさん縛りつけてある。いづれ切に求縁の必要ある女の仕業であらう。何となく哀れ深い。

園中、青葉鬱蒼たる中をしばらく逍遙。福々しい瓜生岩子老女史の銅像、「花の雲鐘は上野か淺草か」芭蕉を中心の三佛聖の碑。お晝は一直まへの江の島料理にする。知人に石屋の老番頭があつて、酒でしくじり、一度あの世へ片足突込んだが、蘇り來ると郊外へ引込んで、隠居同様の店番だが、自慢骨は去らず、何とかの一つ覚え、たま／＼東京へ出ては、自分が行つた食もの屋のことを語り出て、こつちが知らないとなると、須破こゝぞと、口を極めて威張り出し罵倒する、「あすこの店を知らねえんぢやあ」と。江の島料理に入つて置くのも、

このおやぢの罵倒の口を蓋がうためである。なるほど貝、甲殻類、江の島的のものがある。他のものもある。二階に夕、キで、木の幹の截口を並べて横造し、これを踏石に辿り入る小座敷、開いた小窓の口に石榴の盆栽が朱の蕾をつけてゐる。窓外はやや濕氣た夏に入りかけの陽がさしてゐる。飯を食ひながらこれを眺めて、海にもだいぶご不沙汰した。そのうちに行つてみようかなぞとおもつてゐる。

隣の葎簾障子を距てて、小使ひはたんまりあるといふらしい、この界限の若手藝者らしい女が、年寄りのおふくろと弟である少年を連れて來て、しきりに喰べさせてゐる。遊び女が親孝行してゐる圖である。またあはれ深い。

この店を出た斜向ふの叢の中に、しる粉店松村がある。かの子女史がよく寄つた店なので一度、姪御を連れて行つてやつた。蒼古淡白な甘味、九官鳥が閑に物真似をする。「淺草にも良家的なところがあるのね」と、姪御は感心してゐたが、さうである。

ある青年文人來りていふ、「近頃は樂天地の演藝が面白いといふので、小説家武田麟太郎さんやその一黨がよく行くのですぞ」と。すでにその名を麟といふ、その文人が極書をつける

ところのものならば、定めてその藝も鳴鳳の類なるべし。入る。

料亭一直の角から、こゝまで來る軒並に、一聯の土産もの賣店がある。筆者あるとき恵比須大黒の圖柄を頼まれた。参考に探幽、抱一上人など名家を先蹤として、筆を辿つてみたが、どうも面白くない。ふと思ひ付いてこゝへ來て、石版刷りの軸を買つて歸り参考にした。誰が描いたのか判らず、畫風はあくどいが、目出度く福々しいことにかけては、こゝの廉石版刷りの畫が随一である。これでも目出度くないか福々しくないと、輪に輪をかけて馬力をかけてある。この大衆の要求を察して、つけ入るところ、いはゆる淺草式で、いかなる巨匠も及び難い。

樂天地は、もと花屋敷を現代に相應はしいやう、改良設備したやうに見える。中世紀の輿車式の、小馬車に小馬をつけ、子供を乗せて、一廻りして遊ばせる設備などがある。大きいのは、御者の大人だけで、これは身體を二つに折り、折れるやうにして乗つてゐる。無邪氣だが樂な職業ぢやないと同情する。

演藝場は二つあつて、一方は小川雪子一座の劇と、浪花節、少女万才その他である。一方は映畫とアトラクションである。見物は、一方の見物が濟むのを見計らひ、演じ始める一方

の演藝を見落すまいと、競走でたーつと駆け出す。「そりや壯観ですぞ」と青年文人は豫告して呉れたが、今は兩方で、悠々、演技と映寫の最中である。

一先づ出る。それにしても、むかし映畫のスターであつた、小川雪子女史が健在なのを、この實演の舞臺で知るを得たのは、慶福に價する。たとへ見物席は、出入常ならず、磨り減らした板草履や、駒下駄の音わいだめなく、舞臺を散漫にし勝ちの演藝場とはいへ、藝人が藝をやつてるうちは健在である。いのちなりけり小夜の中山である。

片側はすらりと演藝館、片側は池に沿ふてくさくさのものを賣る露店。この露店の中で、いつも感に入るのは、章魚と榮螺を串賣りする店である。すねぶん昔から續けてゐる。人間がこの種のこり／＼したものを嗜好するうちは、この露店續くのであらう。古靴を賣つてゐる店も、すねぶん古くからある。人間が古靴を穿く限り、この店は續くであらう。季節とてレモン水賣る店とバナ、のセリ賣が、行き交ふ燕の影と共に、夏らしくしてゐる。

花月に入る。いゝ鹽梅に吉本シヨウが始まつて呉れる。ふと氣付くと背後のオーケストラ壇に在つて、ドラムを叩く樂師が、その身振り表情、實に楽しく、藝への陶醉三昧に入つてゐる。決して慥へものではない。幸福に見える。プログラムを見るとなにがし原田とある。

眼耳の敏い常連客には、すでに承知の藝人かも知れないが。

義太夫館の万才の他に、万才常設館が二つある。ある館の中には「どうせあたし達のやる事は、暇つぶしに入るお客さんの相手です」といつて、自覺症狀の下にのろ／＼と演じてゐる万才師もある。張切つた藝には感心するが、かう覺めてしまつた藝には同情する。

年若い悲しみに徹ると、大概なことに察し入らぬものはない。

取つて返して再び樂天地の演藝館、ミュージカル・シヨウは今や始つてゐる。題して「初夏の夜の夢」インテリ風の見物人、あたりを見廻して「ピッコロ組はまだ來てないな」といふ。常連の名なるべし。

面白く見物し終り、外へ出て、お晝は少し贅澤したから、夜食は儉約しようと思ひしへ。ハシラの釜めし三十五錢、蛤つゆ十五錢、メ五十錢。

お總菜

家に少し人手ができてみると、早速慥へて貰つて食ひ度いのはお總菜である。一ヶ年ほどの間に、よそへ出て食つたり、よそからとつて食ふ食ものには、飽き果てた。

かの子女史の連載小説で、次に雑誌へ載る分の、原稿を整理してゐると、その中に、お總菜のことが出て来る。菟藟の白和へだの、鯉の中落ち（兩側の肉を取つたあとの中の骨。脇骨の間に僅に肉が残つてゐる、これをこそげ取る）の佃煮など。

これ等お總菜の雄なるもので、殊に鯉の中落ちなどは、東京下町の貧乏長屋で、おかみさんたちが、廉くてうまいものと覗つて作る、最も貧乏くさくて然も粹なお總菜である。

幼時、下町にも育つた女史が、かういふ種類のお總菜を、知つてゐることに不思議はない。しかし幼時に實際、味つてみたかどうかは疑問である。

上品好きで、傳統的な躰の厳しい祖母と、お家流の書をよくする保母に育てられた、長者の娘の女史の幼時は、食物も老女等の標準から、馬鹿々々しいほど苛酷の制限を受けたらしい。

一例を擧げてみても、さかなは生け鰯とか、生きた鯛とか定つてゐて、鹽鮭や切身の魚は胃に毒だとか品が悪いとかいつて、食べさせられなかつたさうである。つまりお總菜式の食品は絶対に寄せつけさせなかつた。女史の女學校時代が、また、舊跡見といふお姫様式の寄宿舎だつたので、續いてお總菜には縁が薄かつた。後年女史の述懐によると、よその兒たちや職人が、お辨當の中に、鹽鮭をお菜に入れて來るのを見ると、うらやましくて、世の中が果敢なまれたほどだつたと話した。

それに引代へ、私は下町の庶民程度の家の悴だ。一體、下町の家は、經濟状態よりずつと食へものは贅澤である。しかしその品種はお總菜の外には滅多に出ない。鯖の味噌煮、鰯のつみ入れ、剥身と分葱のぬたなどより、鹿尾菜と油揚げ、お雪菜に至るまで、あまりに馴染み過ぎて、少年の日の食卓を常套に歎じさせた。

われ／＼は親の家を出て家庭を持つた。私が自由を得たやうに戶外へ出て、ご馳走を食ひ

たがるに引かへ女史がいはゆるご馳走には、今更、興味の無かつたのも無理はない。

私には馴染み過ぎて、常套に感ぜられるお總菜ではあるが、しかしその中には、食ひ慣れ
てしまつて、下町出の人間には、缺けば物足らぬものもできてゐる。干ものだとか、納豆だ
とか。女史は、これ等をはじめ妙な顔をして眺めてゐたが、少しづつ手を出すと、やがて大
好きになつた。仕事に夢中になつてゐる途中、ふと空腹なのを感じ出すと、兩脇腹を童女の
やうに両手で搔きながら「おひものにおみつちい（味噌汁）で、急いでご飯よ」かう臺所に
向つて叫んでゐた。或は「お納豆とお澤庵でよ」などと。白須干しに大根おろしをつけ、醬
油をかけて食ふことなぞも相當歡んでゐた。「お白須にお大根おろし」秋刀魚は腸のところを
嫌つて尻尾の方の切れを自分に取つた。

女史はこれ等の總菜品に對しても、溢れるやうな愛感から、自然と敬稱をもつて呼んでゐ
た。そして女史が、これ等を食べてゐるところをみると、どんな貴重でおいしいものかと思
へた。一體、女史は、その生活とか、持ものとか、仕事振りさへ、同性間からは、嫉ましさ
の加はる好もしいものに感じられた。その魅力の秘密は何でもない。女史は自分に關はるも
のは何でも全身的の愛を籠めて勞つた。お總菜に對する愛惜はその一つに過ぎない。

女史は中年近くなつて、幼時、養親たちにより附けられた、偏食の性質もかなり除かれ、
ある部分は逆に發達して、食幅はすぶる廣くなつた。贅食家の作家とさへ見られた。けれ
どもその食幅の廣さ、贅食と見らるるものは、女史が文學に就ての解釋から來る、精進の一
つで無いこともない。女史は忙しい中に、とき／＼武藏野の散策を望んだ。そのときは、「お
鯉節でも、お鹽昆布でも何でもいゝから」それを中へ詰めた「お握飯のお辨當」を、臺所か
ら遣へさして、持つて行くのを好んだ。食品に對する女史の率直な好みは、かういふところ
に無くもない。一面、女史は幼時の禁斷生活に對する反逆兒であつた。それは幼時親しめな
かつたお握飯や、お辨當に對する遺憾を、急ぎ取戻さうとする復讐行爲でもあるらしい。

巴里は料理の都といはれてゐる。女史はそこで、上院協のホワイヨ亭の、骨の髓入りの清汁
スープを始め、大概な名料理店の名料理を味つた。しかし一方巴里式お總菜料理も疎にはし
なかつた。かの女はモンマルトルのいぶせきキヤフェで、賣れ残りの遊び女たちにじろ／＼
眺められながら、シユウクルートを食へた。キヤベツの刻んだものが酢と油で和へられて、
皿の上に、肘付き布圍ほどの厚味で載せられてゐる、その上に温めた指型腸詰が二本載つて
ゐる。

これをこなして喰べてゐる女史の唇が、腕白小僧のやうに油つぽく光る。
女史眠り去つて二年目、うららかな春に逢ふ。筍とぜんまいでも臺所で煮て貰つて、お總
菜式に、質實に女史を偲ぼうかな。一つは近頃とみに、少年の日の常套な食品が、なつかし
み返されても來たので。

かの子の思ひ出帖

もちろん時局前のことだが、百貨店の宣傳部が、日頃、店の機關雜誌に執筆して貰ふ、女
流文人たちへの禮どころであらう、年の暮、盆といったやうな季節に、何かしら女らしい品
を工夫特製して配つた。かの子もよくそれを贈られてゐたが、その品の中の一つに、美しい
日記帳が、まだ使はれずして遺つてゐた。

絹の表紙で、橘、藤、菊、さういつた花や實の模様、霞が掃いてある。ところ／＼に匹
田鹿の子も使はれてゐる。桃山時代のか、元祿享保時分の模様を模したのか、私にはよく判
らない。華やかで大まかで優しい模様だ。帳の大きさも大判で豊だ。私は、これを自分の書
齋兼畫室の部屋へ持つて來て、座右に置いた。そして時にふれ折につけ、かの子に關して思
ひ出たものを書付けることにしてゐる。ごつ／＼して亂雑な私の仕事部屋の中で、この日記

帳は唯一の優しく華やかなものである。それが滑かにかの女の思ひ出を私から牽出す。けれどもまだ白紙の部分が多い。

思ひ出は思ひ出である。強ひて記憶から搾り出すやうな作業は、追懐の性質の肌理を粗くしよう。肌理の粗いこと、しなやかで無いことは、かの女が一ばん嫌つたところのものである。私は自然の流露を待つ。白紙の面の多いことは、まだ思ひ出て書付けることがたくさんあるやうで、楽しみなどころもある。

それにしてもかの女が眠らずして、この帳を使ふとしたら、何に使つたであらうか。歌のノートか、感想の走り書か、小説の趣向書きか。私は頁につける筆を控へて眼をしげたく。

以下はその帳の中より二つ三つ――

しなやかなことといへば、かの女は素人の手打ちのうどんを好んだ。粉ものを捏ねることに、何の経験も技巧も無いづぶの素人が、かの女を悦ばせようとして、または、かの女に自慢しようとして、平町噺に打つたうどんをこよなく悦んだ。そのとき讚めていふ言葉がいつも「ほんとにしなやかねえ」と、いふ言葉であつた。かの女は一方、職業的専門家が職分として、技術の限りを盡して、完成させた食品に對しても、満腔の敬意を拂つて讚美したが、

無條件で選ばしたら、意在つて技足らざる素人の素朴料理を採るやうだつた。「しなやかねえ」といふ言葉には、作るものの眞身と愛が、むくつけき慥へ方を通して、木地で流露してゐる。その精神的の肌理を感じて、ひとりで出る讚め言葉のやうであつた。

多血質で情熱家のかの女は、體質的にも蕎麥を好んだ。うどんは素人の手打の無技巧なるものだけを悦んだのだが、蕎麥ならどんな種類のもも目が無かつた。中にも唇に冷たく觸れて、蕎麥そのものだけ味へるもりを愛した。けれども、蕎麥屋へ入つて、廉いもりだけを誂へるのは、何となく氣がひける場合には、よく種ものの玉子とちと、もりとを一しよに誂へてゐた。そして、玉子とちの方はそこ／＼に、急いで目的のもりの方へ箸をつけるのであつた。

しかし、蕎麥の食べ方としては、幼時、かの女の母親が慥へて、しよつちゆる食べさせつけられた、菜、大根入りの露汁に蕎麥を浸して食べる遣り方に、最も愛着を持つてゐた。後年かの女は忙しくなつて、そんなこともしてゐられない場合は、蕎麥やが持つて來たもりの露汁を、湯、淡めて、それにお浸物のほうれん草などを、一箸、中に入れて掻き混ぜ、母親の慥へて呉れた菜大根入りの露汁になぞらへ、それにもりの蕎麥を浸して食べてゐた。かの

女の母親はかの女に對し、超人間的な愛と眞身のサービスをして呉れた人だつた。かうして食べる蕎麥には、馴染んだ幼時の味もさることながら、母親のこの超人間的な愛と眞身が、その味に附添つてゐるのを、忘れ兼ねたからでもあらう。

かの女は、その天稟の優秀性と純情と、内氣とのろさのために、幼時からずるぶん嫉みと迫害を受けた。その一方、何人かから、人並では出来ない、眞身と愛の籠つた支持を受けた。その意味で、極めて不幸であり、極めて幸福である生涯を嘗めた、戯曲的性格の女性であつた。

かの女は病氣にかゝり、少し口が不味くなつたとき、たとへ蕎麥を勧められても「生涯おいしく喰べて、一度もあたしを失望させなかつたお蕎麥です。その良い感銘を損じ度くない」といつて、つひに眠るまで蕎麥を口にしなかつたことは、一度他で書いた。不思議なことにかの女が眠つて以來、嘗てそれほど蕎麥好きでなかつた私が、とき／＼蕎麥が喰べ度くなる。それで牌前にも備へ、私も喰べることである。今秋、新蕎麥の出る時分には、何か趣向して、かの女を慰めるに足りる、蕎麥の振舞ひの催しでもしようかと考へてゐる。

深刻な詩人や宗教家の性質に在ると等しき、生れ付きに感じ易い、人生なるものに對する

無常とか不如意とかいふものに就ての、心の傷みと悩みを、彼女は生涯持つてゐた。それを慰めるのには、藝術によつての、偉大なもの美しいものに撃たれるか、實生活では、百パーセント純粹な愛と眞身が、籠つたものでなければならなかつた。そんなものは滅多に世の中に在るものではない。相憎と、かの女の敏感と眞情は、誤魔化されも妥協もしない。晩年、性格が圓熟して、清濁合せ呑む大母性型を顯現して來た時すら「どうも、こいぢや、慰まないねえ」と、とき／＼苦笑してゐた。

かの女ののろいことは有名だつた。洋食の宴會席では、かの女は隣の席の人と話し入つてゐる間に、配られた食品の皿はそのまま給仕によつて運び去られ、満足に食べられたことは滅多になかつた。それで家へ歸つてからいつもお茶漬けを呼んで、食べ補つてゐた。銚子へ一人で講演に出かけたとき、汽車の中で食事どきになつたので、かの女は驛で辨當を買はうとする。どの驛でも買ひ遅れてどうにも買へない。見るに見兼ねて乗合せた未知の紳士が買つて呉れた。その紳士は淺草在住のギブスを儲へる先生とかで、その後ある所でゆくりなく邂逅つたとき、

「あれぢやあ、奥さん、いつになつたつて買へつこありませんや」と、汽車が発車する時分、

やつと墓口を探し出し、驛辨を呼びにかかる、そののろい仕方を模倣て見せるので大に笑つたことであつた。

これだけでみると、かの女は現代に不適性の、薄命の藝術家で終りさうに見える。だがかの女には何か大きく擱んだものがあつた。かの女はよく私に氣付けて呉れた、「掃きつ放しの仕事振りもいけません、さりとして凝り過ぎた仕事振りもいけませんよ」と。かの女は不思議と處世上には大常識と中庸を得てゐた。

人に任した以上、功はその人に與へ、責任は自分が取るといつた將たる器があつた。江戸の豪家、大和屋の嫡女の風格が、自然とさうさしたもののか。

雑草

名のある花卉は、古今の畫匠が描き方を仕組み上げて、もはや餘蘊もなさうにみゆる。雑草には未だそれが及んでゐない。さき頃、不幸から來るもの憂い心境も手傳つて、しばらく雑草を描くことに氣持が入つた。

それにしても、やはり多少は、先人の啓發誘導が必要だ。生の自然から、直接描き方をうち出して來るなどといふことは、われ等の分際ではない。そこで遇ふ人毎に「雑草を描いた畫譜みたやうなものはないかね」と訊ねてみたが、なか／＼無いものだ。和朝のでは山口素絢の草花譜、支那のでは明人畫家の花卉譜のなかで、たまにはそれが主に扱つてあつたり、名だたる花卉の添へに描き込んであつたり、するのを拾ひ出して學んだことであつた。これ等の畫譜は、従前から座邊に在り合せのものである。

雑草を主眼に、見たり描いたりしてゐると、雑草が雑草でなくなつて来る。珍らしく、新しい廣大な天地が、雑草そのものに覗かれて来るからである。

ひとつ、ペン／＼草を屏風大に描いて、白雲を配してみようかなどといふ、野心も起つて来る。かう描かれてはペン／＼草も、もはや雑草のペン／＼草ではあるまい。

この企圖はまた別の企圖に屬する。まさに行ふべくんば、一たん龜の野心を放下して、機の純熟を得てのちに於てすべきものである。作品は野心を描くのではない、描かれざるを得ぬものが、自ら乗り出して来るのである。その際寧ろ畫人は淡々たる態度であらう。この企圖は、そのときまで時間に預けて置くことにしよう。

やはり雑草としての雑草を描く。どうでもいゝやうな草振りに、一人前らしく、花實をつけてゐるのを描くは哀れ深い。

かやつり草、犬蓼程度のものなら、われ等でも名前は知つてゐる。あとの大部分は判らない。つまり雑草である。けれども描きながら、名前の判らないのは氣懸りに違ひない。植物の本でも調べたらと、思はぬこともないが、その勞をする暇がない。菊に似てゐるが何か名前があるに違ひない。藻に似てゐるが何か名前があるに違ひないと、物足らぬ思ひのまま描

いて来た。

やがて畫因も盡き、従つて名前も知るに到らず、たゞ何かしらに似たものとして、筆を通り過ぎ去つてしまふ。この邊に雑草の運命があるらしい。さればといつて、果敢ないといふほどのことでもない。

伊丹派の鬼貫の句に、何でも、蝸牛を踏み潰して、どうとかといふ句があつたと思ふが、いま成句になつて記憶から出て來ない、たゞ俳句にしては稀らしく本能の生々しさがある。感じた感想だけが思ひ泛べられて來る。さういへば鬼貫その人も相當逞しい本能人であつたらしい。若くして豪富な造り酒屋の家を潰し、中年にさむらひとなつて祿を食み、たちまちこれも離れた。晩年には導引といつて、按摩よりやゝ高級な醫術をやつて、生き延びたといふ傳説すら、生むほどの人間だから、相當しぶといものを持つてゐたらしい。年齢も八十に近くまで生きて、死んだと記憶する。

藝術家が本能人としての藝術家か、藝術家としての藝術家かといふ鑑別けは、やはり作品に現はれてゐよう。つまり本能人としての藝術家の作品には、藝術に盛り切れぬ生活慾が、いつも多少、奇矯、妄誕怪誕な形にちみ出してゐる。繪畫ならば野獸派の形である。

天明の蕪村は、古人で學ぶべきものを五子を擧げ、其の中へこの鬼貫も入れてゐるが、彼果してこの人にこの點を認め、しかしてのち、五子の指の數に折り入れたか、如何。

それと反對なのは、芭蕉十哲中の丈草であらう。彼も、本能の性情的なものを、持つてゐないことはないが、それを殺すことに骨を折つてゐる。詩に於てのみ許せる範圍のものを、磨き細めてうち出してゐる。織酒に違ひなく、崇敬に價するが、人間の影は薄い。もつとも彼の生涯が禪僧で、しかも病氣勝ちにもよるが。

藝術上の鬱勃たるものを學ぶには、俳では、私たち門外漢には、芭蕉以前が好材料のやうに思ふ。俳の野獸派フイレスキムの時代である。後の俳句の定型には、盛り入れられるか入れられないか判らないほどのものが、顔を擧めるやうな雜散紛糾の中に、自然生の藝術慾の芽となつて見出せる。

山崎宗鑑の如きは、お話にならないほどバテてゐるが、やはり過渡期を映發した生々しい何物かを露呈してゐる。

多摩靈園の墓地前に、立並ぶ墓石店の一つに、石勝支店といふのがあつた。老夫婦で店を守つてゐる。おやぢはもう六十の坂を越したが、嬰鏢くわくやくたる趣味人をもつて任じ、談敵だんてきが欲し

くてしようがない。バスが来る毎に、誰か知つてゐる人が墓參に來ないかと、帳場から眼をきろく光らしてゐる。

いぬる卯歳の早春、かの子女史じふぢやう入定、その墓地の入手の世話に、偶然この店の厄介になつてから、今度墓裝が出来上るまで、早くも三年、續いてこのおやぢと馴染を重ねてゐる。行く度びに、向ふはよい鴨が見付かつたと思ふのだらう、文樂の人形式に、眉目を超自然に働かして喋り捲る。

聞くともなく聞く。いろくのことをやつたおやぢらしい。もと栃木縣の素封家の出だが、國をおん出て熊谷で郵便局長をしたり、東京の兜町で、銀行や株式の新聞を出したり、ちよつとした話にも、柳橋の名妓を取巻きに連れて歩るき、伊井蓉峰と筑波山麓に隠れ遊びに行つたりした、話の類が多い。浮沈の生涯の中に、相當派手な山もあつたらしい。もつとも話の中には、足利の狐は通力があつて、舊藩主別邸に舊藩主の來られるのを、一日前に知つて集る。藩主には賄が附いて來て、食物が豊富なのを嘗て知るからであるとか。奇蒙の譚に亘ることもしばくではあるが。

おやぢは嘗て酒豪だつたが、五十過ぎに卒倒して三日間人事不省、しかし奇蹟にいのち助

つて今日に及んでゐるといふ。うち見たところ、どこか分別の絲が綻びて、いささか蕩々たる
るところ、畫家中川一政の言葉をかりていへば「化けかかつてる人間」の一人かも知れない。
この老夫婦の間柄は、また特別で、おやぢがかく慕直に辯じ続ける間に、老妻は茶の世話
や用事の暇をみて、一人で活動を見に行く、うなぎを食べて歸つて来る。四方山の食もの
話をする。さればといつて夫婦仲、決して隔ありといふのではない。但、子なし。

うち見たところ、このおやぢ、中川一政の言葉をかりれば、確に「化けかかつてる人間」
に違ひない。しかしまだ化け切つてはゐない。何が故ぞ。うち見たところ、おやぢの喋り方
からわたくし達は、何か訴へたいもの、認められたいもの、理解して貰ひ度いものが、毒氣
と惡熱のやうに感じられるナラである。孤獨無名の文學青年のやうに。

それ、つらくおもひみるに、人、表現を得ざるほど苦しきはなし。地獄は物かはである。
こつちに人を救けるほどの技倆もないが、仕方ない、出會つたが縁だ、少しの手傳ひで、吐
出し得しめられるものなら、その蟄伏してゐるものを吐出さしてやらう。

話の中に、おやぢ嘗て俳句をやつたといふことを聞かされてゐた。そこで、ふと思ひ付い
た振りをして「どうだおやぢ、ちとまた俳句など作つてみないか。短冊は僕が持つて來て置

くから」といつてみた。

おやぢの眼は輝しく光つた。「二十年まへにやつたんだから、どうかしら」といふにはいつ
たが、食思は大に動いたらしい。得意さを混へて句作時代の經驗談などした。次の墓參の節
私は試みにまづ廉短冊を百枚、持つて行つてやつた、曰く「書けたのは僕が貰つて行く。畫
室の支關に飾つて置く。俳句の判る客も來るだらうから」

次の月の墓參日が來たので寄つてみた。おやぢ決然たる顔をして「みてお呉んなさい、ど
うもろまくゆかねえが」といひながら、短冊百枚を眼の前にざくつと抛り出した。それから
かんらからと笑つた。その笑ひ方には「どんなもんだ。一ばん、見て呉れ」といふ響がある。
「驚いたな、百枚一どきに書いちゃつたのかい」私は思はず呟いた。これに對しおやぢは、
百枚宛がはれて百枚描くの、何の不思議やあるといった顔をした。そして「なにしろ、筆
といつたらこの筆だからね」と、さんばらの帳付け筆を執上げて見せ、未だ食ひ飽き足りな
い箸のやうに捻り舞はさした。

私は百枚の短冊を一枚々々みていつた。それは月並のほつくといふ方に屬すべきものであ
る。しかし、人が文字で綴り人が圖象で描けるものを、われ等その類ひでご飯を戴いてゐる

ものは、出來榮への如何に係らず、絶対に輕蔑の念をもつて向ふべきではない。職業冥利とあるものだ。私はところ／＼批評を加へながら全部を見終へた。見終へたのち、私はこれ等のものから、喘いで人を羽撃んとする人的のエネルギーを感じた。おやぢは短冊が粗末なため、氣を易くしてあゝもばら搔きに、書き捌いてしまふのだらう。今度は高價な金短冊紅短冊を五六枚持つて行つてやつた。

次に行つてみると、これ等の短冊も、敢なく帳付けの筆の餌食になつてゐた。私はこれも貰つて歸つた。

おやぢの表現慾は、私のさし水によつて、吸上げ口を見出したらしい。次からは私が短冊を持つて行かずとも、板切れで短冊型のを拵へて、ちやんとほつくが書き込んである。それを私に見せたのち「よかつたらお持ちなさい」といつて、新聞に包んで、私のポケットへ捻ぢ込んで呉れるのである。

おやぢは、盆、彼岸のやうな墓參りの季節には、あらかじめ女史の墓を清掃し、香華も備へといて呉れるのである。しかし以後は、この墓前にも、自作を書いた板短冊を手向けることを始めた。

有難迷惑などといつては相濟まぬ。

ある日、元氣な聲の老人が、私の山の手に在る畫室を訪問した。取次のものに様子を訊いてみると、それは石勝のおやぢであつた。こいつ困つた。忙しさにはたと忘れて、貰つて來たおやぢの短冊を、畫室の入口に並べることをしなかつた。約束だからしてなくてはならない筈だ。

そこでおやぢを家の別口のところに待せ、齒を無くしてからはしきりに戀ふといふ、館氣の菓子を買はせにやると共に、短冊や板短冊を探し出して、畫室の入口脇に、臺上、三尊の彌陀のやうに立て並べた。それからおやぢを招じ入れた。

おやぢ入つて來て見付け「は、は、あ、並べてありますね」と、あつさり他人事のやうにいつたが、内心の満足は推するに難くなかつた。

おやぢは、女史の墓域に造立する、觀音像の彫刻の用事で來たのだが、用談を濟しておやぢが歸つてからも、私は短冊をその儘にして置いた。來る客の中には、これに目をとめて訊くものもある。私はわけを話して、おやぢの藝術が人々に認識されんことに努める。おやぢの句の見本を一つ

萩の花こぼれて袖に墓詣で

晴 亭

つひこの頃行つたら、おやぢは、お盆も近づくが、お盆には、いつも通り前日に墓を清掃し、香華を備へ置く旨を述べた。序に新詠の板短冊も手向けることを述べた。「あれでこの頃は、手向けて置くと、欲しがる奴があつて、黙つて持つてつちまふのでね」

内心、持つてかれちまふのを悦ぶを、わざと隠し「見付けてひつばたいちまはふかと思ふが、しかし、まあ、功德になると思つて、そのままにしとくんです」

この得意さにまで、彼表現の途を得れば、彼も成佛したやうなものであらう。

いちぶしじゆうを見過し來つた、入定中の女史も「バ、のいたづらごころもまた菩提の因」と微笑してゐるだらう。

藝術に悟ありや否やが、氣にかかつたのは四十臺の年齢である。そんなことで人からも聞き、また讀み過ぎ去る藝術家の傳記中からも、この點、心に刻み憶えてゐる。鬼貫は八歳で句をはじめたといふ早熟兒だが、これが「まことの外に俳諧なし」と悟つたのが二十五歳ださうである。芭蕉は十七歳で俳句を始めたが、枯枝の句で俳境を打開したのが三十七歳、古

池やの句で、正風の礎を据ゑたといふのが、四十三歳ださうである。俳人ではこの二つだけ覚えてゐる。

外の部門の藝術家にも、こんなことがあるやうに、書いたものも見當つたが、結局、悟境を開いた年齢はまち／＼であり、たのみや参考にならぬ。私自身の體驗からいつても、不敏の性質には違ひないが、豁然と悟るなんて、芝居染みたことは、少くとも畫の方には無いといふ方が信じられる。結局畫の數を描いて行くうち、灰汗^{あせ}抜けもし眼も見えてき、難しくなりつつ面白くなつて來るのが、いつを境と判らぬほどだん／＼と重るやうだ。

豁然と悟るなどといふのは、禪から持込んだものではないか。

佛法の^{てき}旨を、直に藝術に糊付けして、藝術を權威付けるむかしの習慣に就て、嘗てかの子女史はこんなことを語つてゐた。歌詠みの俊成は天臺を學んで、一心三觀を歌道の極致と悟り、歌道佛道は同じと住吉明神の示現^{じげん}を蒙つて、安心して歌が詠めるやうになつたといはれたり、西行が天台座主の慈圓に告げて、和歌を學べば眞言の大事も判るといつたと、傳へられたりしてゐる。そりや、極端に煮詰めた筋にしてしまへば、さうには違ひあるまいが、文學といふものは、元來この中間の、迷ひのかけはしの上に成立つものであると、云々。

五十歳を過ぎると、藝術家の年齢といふことが、氣になつて来るやうだ。そして鐵齋は九十過ぎまで生き、畫が生彩を發揮して來たのは、六十からであるとか、そんなことをたのみにして來る。長生きさへすれば、どうにかなるものやうに、お灸やらゴルフに凝り出す。

人は物の貰ひ振りで價打ちが判るものだ。芭蕉の偉さは、その貰ひ振りの、水ぎは立つた良さに在る、といつた人がある。その人また曰く、子規の貰ひ振りも萬更ではないと。

およそむかしから、しやの字のつく稼業は、貰ひ振りが良くなくては、稼業が成立たぬとされてゐた。それで貰ひ振りを研究したものださうだ。しやの字のつく稼業とは、曰く醫しや、藝しや、點じや。點じやとはご承知の如く、月並俳諧の宗匠である。かう並べたのは一種の諷刺かも知れない。

煎茶が好きなのを知る地方の知人から、よく茶を贈らるることである。有難味は一つだが茶の質には自ら種別がある。これを罐に詰め分けて、茗茶、中茶、番茶。

一方、頼まれものの仕事にも重いのと軽いのとある。そこで二つのものをさし較べ、重い仕事をするときには、會興を豊にすべく、茗茶を、やゝ軽い仕事るときは中茶を、もつとも軽い仕事には番茶を、かう喫むことにした。

さうやつてみたが、思ふ結果は出ない。良い茶をのんだからとて、必ずしも良い仕事が出るとは限らぬ。第一に、一々さう分別して、のんだりかいたりする面倒が、煩に堪へぬ。胃の腑の方もたまらん。たちまちよしてしまひ、茶は届いたものから先着順に、そして仕事の出来不出来は頼み先の運次第ぢや。

枕につき眠りに入るまでの間、毎日謡曲の集を読む。およそ六十番ほど進んだであらうか。この中で記憶にとどまつた文句といふのは、安達原の「黒塚」の中の、「如何にあれなる客僧止まれとこそ」といふ文句だけだ。あまりに美しく流れ過ぎるものは、具體的の意味で

はこゝろにとどまらぬと見ゆ。

親類のお婆さんが来て、熱が出たときは、鮒を二枚に剥いで、病人の兩足の裏に貼ると、熱がとれるといつた。それで生鮒を釣つて來ようかと、鮒釣なるものに愛感を持出した。釣好きではないが。さし當り病人もないが。

かの子の二度目のお盆

昨年は、かの子が眠つて六ヶ月目にお盆を迎へたので、ずるぶんひどい氣持のお盆だつた、まだ乾いてない傷口を、生々しく吹き検められる感じだつた。知友から盆提灯など頂いたが、その志は感謝しながら、どうも白っぽいところへ、薄色の模様のついでる提灯は、寂しくてやり切れない。その胴へ、強く太く牡丹の模様など描き重ねて、灯した。「かの子もかういふものを頂戴するやうになつたか」この感傷の言葉が、胸の中のどこやらに在るが、出来るだけ意識に上せないやうに努めた。

牡丹の模様といへば、ちやうどその頃、女持の扇子の揮毫を頼まれてゐたが、他人に描いてやるなら、うちの者にもといふ氣がするので、銀扇に牡丹の花を描いて牌前に供へたものだ。かの子が牡丹が好きだつたことは人々の知るところ。

その頃の私の日記の頁を翻してみると、知友から頂いた弔品答禮に、かの子が書いて遺した観音經を、新に版に附してお頒ちする、その箱書を、この際馬力をかけて、大體、終らせしてしまつたことや、まだ外出は苦痛に感じてゐる中を、樂地本願寺で物故關係者の追弔會を催されるのに、遺族として出席し、世話人の老婦人から「女の年取つたやもめは、身のまはりの世話でも、一人で出来るから仕末はよいが、男の年取つたやもめは仕末が悪い」と聽かされ苦笑したことや、奈良縣下の名産の素麵そうめんを貰つて、いそぐと牌前に供へたことや、お盆といふやうなことに、交渉の薄いと思はれる私の上にも、何かしらこの慣習の季節の日は、影響を興へて過ぎたことが記されてゐる。その又の頁に

けふ、ふによくの蚊が出る
と書いてある。これには少し説明が要る。

かの子は、一方、繊細な性質を持ちながら、大體大きなものを好んだ。すべて小なるものに對しては「何ですの、こんなちつち臭いもの」と賛同を肯じなかつた。かの子の謂ふ所のちつち臭いものとは、ケチ臭いものと同義語に外ならなかつた。

小なるものを好まない理由は、小なるものに、かの子自身が不得手だつたためもある。か

の女は幼時手習をするのに、大字を好み、しかも、その大字を書くのに、筆尖は手習の用紙からいつもはみ出して、机の上や疊の面まで汚したといふ。かの子の歎きの一つは「どうかして一生に一びき、蚤のみを捉へてみたい」といふことであつた。藝事以外は手先が不器用で、その上、臭いかの女は、あの機敏な小虫に、生涯食ひ逃げされてばかりゐた。それで口惜しがつてゐた。蚊もひどく嫌いだつた。

ちつち臭いものではないながら、幼いもの、實が入らないものに對しては、憐憫れんぎんの情からいぢらしさを感じてゐた。それであれほど嫌いな蚊すら、子こ子こから躰からだり立てのものに向つては、勞りを興へてゐた。初々しく透き通るやうな胴體に、鮮明な縞柄をつけ、まだ、よくは飛び得ぬのであらう、心細い後肢で、膜のやうな翅はねを搔かい繕つくつてゐる小虫に向ひ、かの子は瞳を凝らしてしばらく眺めてゐるが、やがて萬年筆の軸の方で押しやつたり、机を掌で叩いたりして追つてゐた。「さあ、ふによくさん。立ちなさい。あたしや忙しいんだから」かういふ蚊のこどもに對し、かの子はふによくさんとか、ふによくの蚊とかいつて、いぢらしさを現した。さういつた人の姿は見えないで、勞いたはられた蚊だけは今年も出て來た。その感慨を、この短い文句で私は日記に記しつけたのであつた。

蠶豆が、まだ實が入らないで、茹でるとゴム膜のやうな皮に皺が寄る。これなぞもかの女は、味の如何に係らず愛感を牽出された。「びしゃ／＼なお豆」さういつて、口に入れる前に、つく／＼眺め入つてゐた。かの女は事物に對して、有り剩る愛感を、無邪氣な言葉でいひ現すのに巧みであつた。巧みといふよりも、本然の性質から湧き出るのであらう。かの女は有生物でも無生物にでも、とき／＼それに對し、人に物言ふやうに語りかけることがある。かの女は、墓の悠々魯鈍なところが好きであつたが、初夏の庭に、匍ひ出るそれを見かけると、「お福さん！」さういつて、なつかしき友だちのやうに呼びかけてゐた。こども時代のあの期間はみな詩人だといふ。環境の自然物の如きすら、彼に語り交すからだといふ。かの女は生涯、この詩人の期間の、こどもの胎を失はなかつた女のやうに見える。かの女は行住座臥、自縫ひの袋に入れた、水晶の觀音像を離さなかつたが、とき／＼像を袋の中から取出し、指尖で彫像の面をまさぐりながら、託つのを聞く。「辛いね。あんた、どう思ふ？」これは託ち言の中の一つである。

かの女が眠つてから一年半に近くなつて、二度目のお盆が來た。この間の歲月は、私に取つて、苦しいばかりの一生涯を、新に閲したやうな、長い感じもすれば、歎きにとちつてゐ

るうち、早くも經つてしまつた、一瞬の間のやうにも思へる。何だか判らない。かかるうちにも、たゞ眼前の事實として、フランス巴里留學の息子太郎が、獨逸軍攻略意圖の前に於ける、危機のこの首都に踏み止まつて、畫作にいそしんでゐることである。嘗て彼に會つて歸朝した畫家のS氏は、この頃人にかう語つたといふ「太郎さんは、最後まで巴里に踏み止つて勉強する人の一人だらう」と。むす子は、徹するといふ事を好んだ、母親の性を受けたのであらうか。私は歐洲に戰雲が捲き起つたとき、手紙を裁して、彼にかういつてやつた「お互ひに身の上の行末の事は判らない。たとへどつちがどうならうと、おまへの母親の心に於て護り合ひ、生死の關には距てられないだらう」と。私は毎日歐洲の戰況を新聞電報によつて待ち構へて見る。巴里在住の邦人の消息に就ては殊に眼を皿にして見る。けれども心の底の底には、息子の身の上で就て、どうにかかうにか透り抜けた安心がある。あ、あ、これは誰が教へて呉れたのであらうか。

かの子が眠つて以來、一年半近くの月日を、私は人が逝くてふ死の世界の形貌消息を見詰め續けた。一つのものを見詰め續けるといふことは、つひに同化してしまふといふことである。私は特に死といつて、區切られて窮屈な世界を認められなくなつた。生命力のあるも

のは、死の世界に入つたつて引き續けて行くだらうし、その無いものは、生の世界に在るうちでも寝呆けてゐるだらう。人のおもひが、純真率直に燃えてゐれば、生死の距てを貫いて、生命力化するものであらう。こゝで使つた生命力といふ文字は、何やら生理的な有機性のそれに似通つて、生臭い感じのする表現だが、兎に角、生死に蹉へられぬ存在のことである。眠り去つなかの子や、爆弾下のむす子の身の上を見届けるには、この道を辿つてのみ、終始を完うし得られるやうに思つて來た。私はこれを他の人ではない。かの子によつて教へられた。

顧つてみるのに、かの子といふ女は天衣無縫、童女がそのまま大人になつたやうな女であつた。うち捨てて置けば、いはゆる天界の生物でもあつたであらう。かの女が悦ぶとき魂を高揚さすとき、かの女全體がそれに成り切つて、一微の暗い影さへ覗かなかつた。それはこの世の人間には、滅多に在り得ぬことである。従つて、それは、ある側の人々からは、誇張のやうにも誹られ、思ひ揚つたもののやうにも嘲けられた。もしかの女をこればかりのものとするなら、誹られ嘲られても仕方はあるまい。だが、しかし、かの女には、與へられたこの明朗な性格を差引して、なほお剩錢の出る暗く楔び込まれた、憂愁な性格の他面があるの

だつた。

それにはさまざまの理由も原因もあるであらう。だが究極、詮じ詰めてみれば、人間が人間として生れた以上、どうしても背負はなければならぬ、久遠劫來の諸行無常の運命、不如意の運命——かの女の背負つたのもこれに外ならなかつた。多かれ少かれ人はこれを背負ふ。けれども、天生この運命に敏感なものにはこれが重く、然らざるものには風馬牛のこともある。

かの女は中年前より晩年まで、かなり幸福な心身の生活を、送つたもののやうに思はれてゐる。私にしてもそれを認める。

だが、その生活の間に在つて、かの女に謂れなき苦悶や、癒すべからざる憂愁がしばしば見舞つた。「もう、引上げるのに骨が折れて遣り切れませんわ」「どうしたら、いゝんだらうな—あ」

引上げるのに骨が折れるとは、人世の低調を嘆いていふのであつた。どうしたらいゝのかと迷ふのは、人世の矛盾に思ひあぐねて嘆き出すのであつた。墮天女といふ言葉がある。常樂我淨、華果充滿の世界に住むべく相應しい、無垢の心身もちて、何でこの娑婆に墮ちた

のだ。解し難く、答へ難きかの女の歎きを聴くときに、私はいつもこの墮天女といふ言葉を思ひ出した。

かの女が眠り去り、私は獨り立ちの身となつて、始めて、私はかの女の歎きや嘆きが、少しづつ判つて来るやうに思へた。形にどれと見えなくても、實際、かの女は人世を支へてゐたのだ。少くとも私たちの頭上の天蓋となつて、娑婆の雨風を妨いで呉れたのだ。人世問題をなぞといふことに就ては、總てかの女に任せて、私たちは、たゞ眼の前の仕事さへしてゐればよかつたのだ。今顧みて「昔はものをおもはざりけり」の感が深い。

人世の諸行無常、不如意、かういふ難點に對し、かの女は負けてしまつただらうか。私はかの女が負けたとは思はない。それより勁いものがあるのを、かの女によつて教へられつつある。

これだけの學得體驗でも、かの女の牌前に、かの女の好きな枇杷、鮎と共に供へ、かの女が眠り去つた第二年目の、お盆を迎へようとする。

重荷とかの女

私の父といふのは東京下町の書家で、稼いでゐれば一家食べて行ける程度の生活であつた。母は七十三まで生きたほどだから、根に多少のねばり強さを持つてゐたが、教育の無い普通の主婦だつた。借家住ひをして女中を一人使つてゐた。周囲の町家から「先生の御宅」と呼ばれて、知識階級に扱はれてゐた。

父は「口で叱言をいはれてから判るやうでは駄目だ」「わしが叱言をいふときはそりや最後のときだ」かういふことをいつてただけに、ほとんど叱言といふものはいはなかつた。めいめい自分でカンを働かして、反省し啓發して行けといふ方針だつた。父は家の者や周囲の人に對して、氣に入らないところも、自分は忍べるだけは忍んで、黙々として働いてゐた。この無言の睨みは相當、人にこたへた。

父が終世の恨事は、自分の家が潰れた事であつた。父の父は伊勢の小藩の儒者で、相當格のあつた家らしい。人事や世事に疎いたため、浪々の身となつた。父の父はこの浪々貧窮の中に死に、その妻も、幼少の父たちを残して死んで行つた。父は物どころつかぬ時分から、自分の食ふことを求めながら、家の再興といふことも志さねばならなかつた。父はいろ／＼のことをやつたが、結局、中年前後から下町の書家に落付かせられ、子供も多く出来てみれば、自分の生涯の豫算も飛躍的に見積れなかつた。父は息子を意識し出した。

「家を興せ」といふことはこの無口の父が、あらゆる語黙動靜を擧して、息子の私に鑄込んだ唯一の命題だつた。その方法としては「まづ手近かなことから鍊成して」「働いて食へながら勉強」「二代でゆかなかつたら三代三代之かけて」理想に到達すべしと教へた。

そんな方針で、私は小さな妹を負うて、井戸から水酌みをしたこともあれば、畫の師匠の徒弟に入り、玄關番やら臺所手傳ひをしたこともある。一方、溺愛の性分もある両親とて、「一ちゃん、一ちゃん」といつて我儘もさせた。

父は伊勢生れなので、太神宮さまを祭つてゐた。私は總領息子といふので、父に代つて、毎朝炊き立てのご飯を、へぎに移し、神棚に供へる仕事を、中學時代勤めた。先祖の位牌を祭

つてある佛壇には、ご飯を眞鍮の臺附椀に盛つて上げる。私に在る宗教心はかういふ薰習からも來てゐるらしい。

遊び盛りの少年時代から、心に置かれた「家を興せ」の命題は、私をして一刻も油断してはならない重苦しい氣分にした。青年時代には野心の吐け場に困り、奇矯や自暴自棄になつた。それを、重きものを擔ふほど力勁き人生を生むといふ、大乘の勇を教へて、この命題の價値を開顯して呉れたのが、かの子女史の性行であつた。私のむす子はいふ「もしお父さんに、さういつた重荷と、おかあさんのやうな人がなかつたら、ちよつとした天才で、裏長屋で呑んだくれて、天死しちやつてたんだよ」と。三代目よろしく頼むよ。

わが家の子供の育て方

かの子女史の「女體開顯」といふ長篇小説の中に、小判の鑑定こばんのしんぎのことに就て書いたところがある。

むかし兩替屋で少年店員を雇入れたとき、その少年店員には、しばらく本ものの良い小判ばかりを手弄てならせて置く。そして少年の無垢な感覺到、「本ものの」如何なるものかを染み付かしてしまふのである。すると少年は、今度贋金にせがねものの小判に逢つたとき、教へずとも、それを嫌ひな蟲のやうに、撥ね除けてしまへる。

はじめから、本もの、贋ものを、交まぜこぜに、少年に宛がふと、少年はつひに「本もの」のいかなるものかを覚え込まず、そのまま成人し、一生、鑑定の曖昧な兩替商人となるさうである。

この間、ある機械學校を參觀した。そこで新入生に、まづ鐵材を手の鑑やすりで磨り平める仕事をさせてゐた。磨り平めた面が、精確に平になつたかどうかは、面に砂を撒き、定規じやうぎの板で掃いてみれば判る。少しでも砂が残れば面には凹凸のある證據だから、鑑で何度でも磨り直させる。かくして新入生の純な頭に、まづ「精確」の何ものなるやを自得せしめる。この技術家としての肝要を掴ませてから、難かしい知識にも、製作にも向はせる。

三味線なんかも、習ひ始めのとき、あまり先を急がず、まづしつかりと、音の칸どころなるものを覚え込ましてしまふ。

さうしないと、將來どんなに藝の業わざは巧みにならうとも、結局、調子に難のある弾き方をするさうである。

以上の話などで暗示が得られるやうに、こどもの無垢な魂に向けては、まづ良識の基礎になるところのものを染み込ませてしまふ。

多少時間や辛抱が要るけれども、急がば廻れで、却つてその子供の生涯のためになる。

子供のこゝろに染み込ませて、何が一生良識の基礎になるやうなものであらうか。これこそ親として眞剣に考へなければならぬ問題である。僕等のここでは職業柄、方法の一つと

して、純眞性を有つ藝術品に親しませることにしてゐる。

市場通ひ

まいにち午前十時過ぎになると、買物袋を提げて市場へ買ものに出かけることである。この習慣も數へてみると一年あまりになる。

はじめは男世帯の止むなき仕儀に出たのだが、續けるうち興味も覺え勉強ともなつて來た。なにしろ引受けてゐる以上、一日怠れば一日の食じきに影響して來る事だから、懶なまけられない。行つてみれば生活の品が受け渡しされる間に、世の中の動きが書物ならず眼に讀まれる。これが自然と出ぶせうの人間をも、散歩運動とうき世學問を兼ねた日課の買物行に、春夏秋冬押出さして呉れるのかも知れない。この頃たまたま料理店などで食事をしていても、すぐ材料のことが頭に來て、その苦衷を察すると、うまく食ふといふわけには參らぬ。それよりか自分ぶんぜんの分限内で、粗末な品でもたつぷり性の知れたものを、市場で選んで來て食

べる方が、實にもなり氣が樂である。かういふことも出ぶせうな人間に、一年以上の日課を
續けさせた、理由であるかも知れない。

淺草公園池の端の賣店で買った、魚屋さんが持つやうな大臺口の、紐を首にかけ懐に入れ
る。

中に小錢を入れてある。襦袍の上に、これも淺草邊で買つて來た丈夫な袖外套を被る。

買物袋はズツク製で、口は鎖止めになつてゐる。鉢一つ、新聞紙二三葉を忘れまい。

洒落氣も、道樂氣も無い人間にとり、これが近來唯一の好みを立てた支度である。想へば
われながら下賤の生れ付きだ。しかしこの事も、萬更、必要から來ないものともいひ切れな
い。すでに半白の髭を生やした知識階級の初老人が、身分のままの服装で毎日、市場通ひは、
たちまち目立つて自然を害す。市場通ひをする以上は、たゞの買出しの市翁とこそ。

市場は、私の家の近くに四つほどある。遠いのは往復二三分間の行程、近いのは五六分
間ほどである。おの／＼特色がある。大きくて賑かな市場、小さくて賑かな市場、鄙びてゐ
るもの、閑々として超越してゐるもの——そして人は、必ずしも豊富で賑かな市場ばかりを
好くとも限らない。寂寥とした市場も、とにかく立つて行つてゐる。私はその日の時間都合、

買物都合、また身體や氣分の都合を勘へてこの中のどれかへ行く。

けふは少し時間もあるし、歩き度い氣持から、一ばん遠くて賑かな市場へ行く。

青山通りは、電車道を路線の工事をやつてゐる。午前春陽は南側の歩道を影にして、北
側の歩道から店並を、鮮に、また、あたゝかく暖めてゐる。

私はまづ影の南側の歩道を、店頭を見検めながら行く。世の移り變りを反映して、とき
どき思はぬ現れに出會はぬこともないので、注意を怠るわけにはゆかない。額縁、印刷店が
半分店構へを改め、秋田の搔餅の素材を賣り出してゐる。さうかと思ふと菓子店の飾棚に、
季節のさくら餅が例年通り並び、近所の尼寺の若い尼僧が買ひに入つてゐる。

石疊の上を、これも買出しどきに履く、頑丈な古雪履を滑らして行くと、片手に提げてゐ
る買物袋の中で、鉢がことり／＼と鳴る。

私はこの買物袋に親しみを覚え、嘗てはじめてこの袋を買求めたとき、その腹に、

墓

の一字を書き度かつたことを想ひ起す。これも前いふ通り、目立つて自然を害するので、
胸の中で書いた。

希臘のパンテオン聖堂を、小さく木造にしたやうな形の市場である。正面にちよつとした庭木を植ゑ、左右は出入口になつてゐる。左側の入口を入つて行くと、角の空地に、鑄かけ師が出張つて、鍋釜の繕ひ直しをやつてゐる。注文の品に、アルミの湯たんぼが五つもずらりと並んでゐるのは、一時季の用を足させたので、損所を繕はせ、次の冬の用に藏つて置くためであらう。

通路には乾菓子店と肉屋とが向き合つてゐる。その次は乾物雜貨店と魚屋とが向き合つてゐる。時刻は客の出盛りの十一時頃なので、肩摩雜沓の中を、魚屋の男たちのふり聲が叫び立てられてゐる。背中合せになつて、もう一軒、向ふの通路に面し、魚屋が店を開いてゐるが、こゝの叫聲とあちらの店の者の叫聲と、暗黙のうちに競争してゐるやうである。

「はう、らつしやい」「はうは、はう、らつしやい」

經驗を積んで來ると、袋の都合で、買物の順序に、心すべきことのあるのが判つて來る。つまり、押して潰れぬやうな青物は、先に買つて袋の底に詰め、それから、ともかくもである。けれども魚のやうな品は、料つて貰ふ時間がかかるので、まづ先に見立てて置き、場内を一周りしてから、歸りに受取るのが得策である。かういふちよつとした事も、任運にやれ

る迄には、半年以上の時日がかかつてゐる。稽古といふものは薰習にあることが判る。

魚屋の小さい屋形の中は、蒲鉾、はんぺい、貝類などの並べ場所である。紅皮の蒲鉾は桃の節句の名残らしく、蛤は汐干どきを想はせる。

大きな屋形の中は、生魚類の並べ場所である。色とりどりの魚は、電燈の光を反射して綺麗である。この頃は品拂底であるが、それでも看板になる鯛、比目魚、などの主魚を上座に、下座には鱈とか鯖とかいふ通塗の魚は季節關はず並べてゐる。皮剝、きんちやく蟹など變つたものも出てゐる。屋形の奥に、いつも眠さうな眼をした、洋装の娘が帳付けをしてゐる。若主人に訊くと、それは妹で「この頃の娘は生意氣でいけない」と解説する。兄の謙遜か。

一わたり見渡して、私には、やはり、季節を告げ顔に、白魚がへぎ折に載つて、魚臺の角に飾られてあるのが心を牽いた。長方形の折に詰められて、白瑩の板とも見られる魚の塊は、すこし見詰めてゐると、一々の魚目が、ペン尖で突いたやうに見分け出される。次いで姿の一びきは、指の丈けあまりにも、生ひ立つてゐるのが辨へられた。私はふーつと息を吐き、「また、春が來たな」と呟いた。

價を訊くともちろんバチ(場違ひ)であらうが、とにかく廉くなつて一折三十錢だといふ。これにみつ葉を配して、白魚の玉子とぢを髓へることなら、この頃のみつ葉は百匁四十錢がたはする。いくら儉約しても五十匁金二十錢以上は要る。

ちよつと考へないわけにはゆかない。その上、近頃の玉子の貴重さ、白魚の玉子とぢか、玉子の白魚とぢか判らないものが出来上る。

それをしも、推して買ふべく決したのは、この食品をかの子に供へて、昭和十六年のうつし世の春を味ひ知らしめ、餘饌を喫して、私たちにかの女の詩魂を享けたためである。

想へば雨につけ風につけ、私の悼みごころは徹つて、幽明、界の距てを絶してしまつた。

あに生死の分ちあらんや。かの女が無限に生くべくば、私もしか生くるものである。來り過す春秋は、水による波ひく浪である。さりとしてこの波浪を、仔細に檢し越ゆる以外に、無限に生くるものの作業はない。慘風悲雨また亦かくの如し。

私に足りないのはかの女の詩魂である。かの女ほど潤ひと逞しさを持つた詩魂も少からう。これを享けてわが同胞の性情の滋料の一分ともなし、長期に堪ゆる根氣を養はしむことこそ、私たちの同胞に對する愛と、職域の奉公に外ならない。白魚を介して春、春を介して

無限、けふ供へん春のうろくすにより、かの子の詩魂よ、うつし世のうつし身にほゝ笑みかけ來れ。

總菜用に小魚一皿買ふ。「勘平にしといてくれ」といふと、魚屋の若主人「勘平か、覺えたね」と笑つて諾ふ。勘平といふのは、魚の腹を剖いて料ることの符帳で、忠臣藏の芝居の勘平腹切りから來てゐる。何かユーモアもあり、一言で埒があくところが符帳である。私は一年あまりの市場通ひに、かういふことも覺えた。

鉢と新聞紙一枚を魚屋に托し、私は、横の通路を距てた八百屋の店にさしかかる。堆い青物の山には、龜井戸大根、新露などを見受ける。老いた白菜は剥かれて細り、京菜は蓬々と繁げり育つて、呆けたやうでもある。

先走つた鞘入りの豌豆、巨獸の蹄のやうな筍

小燕といふものがこの頃はすむぶん永くある。これを糠味噌漬けにして、その葉を刻んだものが、冬中から早春へかけての、茶漬け相手の珍味であつたが。

訣れを惜しむ氣持で、蓬々と育ち繁つた京菜を一株買ふ。八百屋のおかみさんに手傳つて貰つて、これを買物袋に詰め込むと、これだけで袋はほとんど一ぱいになる。暮、月を吞

む。みつ葉を買ふのも忘れまい。一握り受取り新聞紙に包んで、買物袋の端へそつと差込む。袋の角にどうやらまだ餘地がある。新若布一束押込む。

時折、山河田園に憧れながら、忙しさに、近頃、旅といふものに出たことが無い。八百屋に青味や菜根が積まれてゐるのを、せめて自然に親しむものとして、眼で眺め取り、鼻で嗅ぎ取ることである。

それでもみず／＼しく爽かな氣が蘇らないことはない。

しばし佇んで眺めてゐると、中年の奥さんが、肩を抉ぢのけて蒔蓀草の森に掴み付く、家庭服の娘さんが前に立ちほだかり、花キヤベツの畑を掻き分ける。買出しは、家庭に事缺かせられない大事と、體驗的に知つた自分には、癢にも觸らぬ。かういふ場所で安閑としたがる、こつちこそ悪からう。家の中の部署者たちから頼まれた、粉石鹼、醬油注ぎ、電球、かういふものを買ふのも忘れまい。袋に入れられぬものはポケットや袖に、晝室の花を替へるためにあらせいとう一束。かくて再び魚屋へ戻ると、勘平された小魚も、白魚折と共に新聞紙に包まれてゐる。

歸り途に、青山通りの八百屋でたくわん一本。たくわんにも、うまいますいを賣る店があ

るので、見分ける必要がある。それを新聞紙に包み

春の日や黄金造りの太刀提げて

この太刀少からず臭ふ。あまり人のそばに寄つては歩けない。

花鳥

興味が持たれる雑草の畫を、まだ描き飽かないうちに、花鳥の畫をぼつ／＼頼まれる。さき頃よりのことである。稼業のことゆる描く。知らない鳥は手近から粉本を仕入れて描く。

稼業といふとおかしがるかも知れないが、古人の書畫は米鹽の資のためにも描いた。華山はもとよりさむらひであり、竹田は儒者であつた。さればとて稼業の畫に誠實を缺いたわけではない。

鶯、鶏、鶴、雁——幼少のころ、狩野派の師匠に手ほどきして貰つた、鳥のいろはに屬するこれ等の鳥の描き方を、憶ひ出し／＼それに花卉草木を配して描く。雀——

雀が描ければ、山がら頬白は描けるわけである。鶏が描ければ雉子、山どりは似たり寄つ

たりのものである。錦鶏鳥もさう難しくない。かくて古人の先鞭に導かれて、鳥の種類の数を増して行く。筆端野望を孕みて、何か氣取つた鳥もがなと思ふやうになつては、鸚鵡（はちやう）十二黄（きれんぢやく）などといふ、名前さへしちむづかしい鳥のたぐひまで描く。

さき頃より世上に花鳥畫が流行であつた。その餘波、われ等の如き鳥にうるとき畫人にまで、需めの浪の浪がしらを打ち寄せて來た。それなら、なぜ、花鳥畫が流行つたかの問題になると、もはや流行の浪を冠りつつある畫人には判らない。たゞ描くだけで、解き明しをその道の人に譲るのであるが、もし花鳥畫を描く畫家の、氣持の體驗を問はれるなら、それは落付いて、大人になつたやうな氣持のするものであると、答へることができる。

技術の方からいふと、鳥の畫はなか／＼難しい。なにしろ形がさう大きくないところへ、鋭敏な感覺が一ぱい詰め込まれてゐる生き袋なのだから。中にも嘴と足が難かしい。この二つのものの取付け方如何で、すぐ素人臭く見える。ほかの種類は畫だとして、嚴密にいへばどの點も抜き差し成り難いものだが、一應のことなら山水畫のやうなものは、まあ／＼融通性がある。つまり巒峯の不手際は、暮靄の墨味で描き活したり——ところが鳥の嘴と足に至

つては、似顔畫の輪郭と一樣で、一筆^{かう}下の調子で、それが物になるかならないかが決まる。およそ直感的、運命的なものだ。うちのむす子はおやぢの花鳥畫を評して「おとうさんの鳥は、大概どてらを着て、股引を穿いてゐるね」といふが、よしんばそれは着ても穿いてもゐるにせよ、どてらの襟元より、また股引の筒口より、いかに鳥の嘴と趾^{あし}さきが、鳥の中にも鳥らしく、輕妙洒脫に脱け出てゐるところに、眼を着けて貰ひ度いものである。どうだむす子。

なほ進んで氣の付いたことは、花鳥畫といふものが、東洋繪畫の、かなり重要な部門を占めてゐることである。鳥そのものが繊細巧緻の生ものであつて、生命の敏感性を、最も焦點的に、反映する存在でありとするゆゑか、人間本有^{ほんゆう}の原始性情を盛つて、表し現すに、最も手頃^{ていねい}恰好の假托者となすゆゑか、多彩の賦彩に堪ゆる對象物なるゆゑか、中唐以降、花鳥畫は獨立した繪畫部門となるほど、鳥は東洋の畫人に描き扱はれて來た。殊に南唐の徐熙、蜀の黃筌の二名手を出すに至つては、後世永く徐氏體と、黃氏體と、花鳥の描法様式を、二つに規定するほどの盛況を來した。この風、和朝にも及んで、その派に非ざる諸流の畫人も、多少の經驗をこの種の畫柄に積まないものはない。この間、畫本屋へ寄つたら、明治初期文

人畫の巨匠、田崎草雲の筆に成る、花鳥専門の版畫の一束ねを目にしたが、寡聞の筆者としては、物珍らしくも、また然るべきやうにも思へた。少しく大膽にいへば、東洋近代の繪畫は、花鳥畫を中心にして展開されたともいひ得られさうだ。

實際描いてみて、鳥くらゐ筆遣ひに細心の注意が要り、描く氣持に肌目^{きめ}のこまかさを、要求するものはない。それで筆を下す毎に、息を凝すわけであるが、他の畫なら例へば前述の山水畫のやうなものなら、圖中のどこかで息のつける場所もある。しかし鳥になつては鳥そのものの尖銳を鈍らすまいとして、息を凝らすのみか、配合する花卉草木によつても、鳥の繊細な表情を打消すまいとして、これを描く分になつても息を凝らす。花鳥畫を一枚仕上げらるまでには、鮑採りの海女が、深海へ潜り入るやうに、何度か息を詰めてかかねばならぬ。花鳥畫の大家はたいがい肺臟の強い人だらうよ。幸ひ幼少のころ、水泳を習ひに行き、水潜りで息を永く續かせる稽古をした。その稽古が花鳥畫を描くことに役立つとは、世の中には見當違ひの利益もあるものである。

宮本二天の描いた雀の墨畫を見たが、全幅のうち、息使ひをした場所は、どこやら皆目見當がつかない。全幅中、息を凝らしたまま、終始、一張りの調子で描き切つてゐる。鶉では

あるましい、人間でこれだけ息が續かることもあるまい。やはり、劍道に於ける太刀遣ひの動作と、呼吸の關係が、畫を描くときにも、自然と應用されてゐるのだらう。

藝術家の素質にもよるだらうが、卓犖豪宕たくらつかうとうから輕軟和柔は移り難く、輕軟和柔から卓犖豪宕へは比較的轉じ易い。しじゅう花鳥畫のやうな、微妙纖銳な畫柄のもので、苦勞して置くことは、やがてほかの畫柄の畫家に轉ずる場合にも、なにかと利便は多からう。

結び付けられて描くといふことは、いつの間にか描いてるものに、親しみと、魅力を見出して來るものである。血氣熾んな時分に、惠比須大黒の畫會を頼まれて、往生したことがある。何たる俗惡な畫を描かして、藝術家を冒瀆するものだ。けれども描かなければ、妻は病床に臥し兒は饑に泣くといふ、境遇を脱するわけにはゆかなかつた。唇を噛みしめて描き重ねたが、無我でにこ／＼して顔なぞといふものは、圖柄に關係なしに好感が持てるものだ。今度かう福々しく、今度かう福々しくと、描き試みるうち、所定の枚數を描き終へたことであつた。今でも折々、この圖を頼まれて描くときには、むかし共難儀ともなんぎして、一つ竈くまどで飯を食つた仲間に、逢ふやうで、福神ながらよそ人とも思へない。何か久濶を叙しつつ、茶飲み話をするやうに、なつかしく描くことである。むす子おやちがとき／＼機嫌顔をするを評

して「貧乏長屋の惠比須さまだ」といふが、そりやさうもあらう。あの畫會の頃の貧窮と、描き現さんと念にかけた福相とが、ごつちやに一つ顔に刻み込まれて、今に残つてゐるからだ。

はなし餘談に亘つて恐れ入るが、花鳥の畫とて最初、先手は、註文主から打たれたので、面白からう筈はない。考へてみるのに、鳥などといふものは、食ふ鳥以外に魅力を感じたためしはない。雀は、雜司ヶ谷鬼子母神に參詣の都度、名物の燒鳥で食ふだけが馴染み、鶉は、たゞきにして、築地の錦水の辨當の菜に入つてゐるので覚えてゐる。鶉つひみは岐阜の山奥で、霞網にかかつたものの、腸をひしほにして送つて呉れる、その風味で姿を察するばかりだ。それが花鳥畫を描くなんて、おかしくつてと思はぬでもないが、決して描くのを斷らない。

老來しきりに、畫に對する勉強慾が嵩じて來た。恐らく年齢の加減で、諸慾の洩れ口が心身に閉がれ、慾が畫へとだん／＼一本口になるせいだらう。

頼まれて、では不束ふつつかながらと鳥を描き出してみると、前福神同様、親しみも魅力も覚えて來る。花鳥畫ならざるべからざる理由も發見して來る。機縁のある間は、まあ勉強さして貰はふと思つてゐる。

古典の定石を學ぶ粉本には、なるべく版本の畫鳥を集めてゐる。複製の寫眞にせよ、肉筆を基としたものは、その畫家の個性なり、主觀なり、訴へなり、癖なりが、あまりにあらはに出過ぎて、畫鳥の普通の範疇を、知るに煩はしいところがある。版畫といふものは、度重なる版面の磨滅もあり、また色彩や描法や筆技に、制約があつて、窮屈のところ、却つて骨筋だけを太く現してゐる。大梗を掴むに便利だ。

ところで、この間、應擧の畫譜を求めたが、その中の鳩の圖は、左趾の前向きが四本になつてゐる。畫家に何か意趣のあつてのこととも思はれず、弘法にも筆の過りにしては、過りが大き過ぎる。たぶん翻刻に翻刻を重ねてゐるうち、彫版師がこんなことにしてしまつたのだらう。

いま仕事部屋には、黄の萬兩の實が壺にさしてある。欄干の空に、冬の晝の月が淡くかかつてゐる。疲れた筆をさし置いて、また畫譜を開いてみる。敦厚謹直な畫匠の筆に描かれた、鳩の左足は、相變らず前四本である。四本をけんとも思はず、鳩は濃淡墨二色の麥の穂に對して、眼をぼつと丸くしてゐる。

父

かの子女史がなくなつたとき、追悼會に使つた、生花造りの額縁入の大寫眞を、中に据ゑ、私が傍に護つてゐる寫眞を撮つた人がある。あとで出來上つたのを送つて呉れたが、見ると私の姿は私のおやぢそつくりだ。

ふだん肖てるとも思はなかつたおやぢだが、私がおやぢに肖るべき年齢に達したせい、それともかういふ打撃の場合には、私の崖肌が崩れ墮ち、中に藏はれてゐたおやぢの山骨が現れ出るか、とにかく女史の寫眞を護つてゐるのはおやぢだ。私ぢやなかつた。

家や悴を支へて呉れてゐた嫁を失ひ、途方に暮れた氣持は内に、おやぢは親らしい威容と禮容を取繕ひ、寫眞を護つてゐる。しよんぼり見えて肩肘張つてゐる。

私のおやぢは氣が弱かつた。それにも係らず、或はそれがために、自分の感情といふもの

を外に現さなかつた。堪へと睨みを持ち續けて、一生を終つた人だ。

兩親に早く死に分れ、幼少より苦勞しながら、彼が父の代に浪々零落に陥つた家を、再興するのが念願であつた。運拙く、とても自分の世では覺束ないと見て取り、それを私に噛み含めた。方法としては「何代かかつても關はぬ、根氣よく」といつた。

私が女史を貰はうと、女史を連れおやぢに見せに行つたとき、おやぢはやつと承知した。少し打解けてから、かういふことを女史にいつた。「悴は格別のところもないが、氣は優しいものなのだから——」

嫁に對して安心のゆくやう、悴の性質を保證した。これは親として悴に好意ある證明に違ひないが、私の能力を説明し、格別のところもないといつたのは、親として大やうな謙遜ばかりではない、事實、おやぢは私をこの程度にみてゐた。今になつてみて當つてゐないこともない。

女史に對しては、彼もさすがに感ぜられるものがあつたらしい。書家であるおやぢは女史の書く字を見てかういつた。「あんたは手本の字は習はなくてよろしい。自分の字を書いて行きなされ」つまり天分を認めた。

悴夫婦の生活はがたびしだつた。試煉に死にも狂ひだつた。中庸を好み「程」といふ印を拵へて、落款に使つてたほどのおやぢに判りやうもない。悴の生活とおやぢの生活はしばらく離れてゐた。私たちの生活をがたびししたしたのは、一つは當事者の私の性格の矛盾からでもあつた。私は親譲りで、おやぢが確に證明したやうに、氣の弱い生れ付きである。しかしこれではとても、おやぢが渡した「家の再興」などといふバトンを握つて、馳けられないと歎いて、逆に抵抗療法と出た。日露戦争時代、私はある畫家の邸の玄關番をしてゐたが、ふと考へて、押しの強くなる修業をするため、夜な夜な、號外賣りに出てみたやうなこともある。本性と修得とに、ひどいむらがあるまま、私は家庭生活に入つた。これでは相手方が迷惑するのも無理はない。

しかしさうかうするうち、私たちの生活も多少は落着き、する仕事も少しは世間に芽出して來たので、おやぢもさうとはいはないが、筋を伸ばした顔付をして私たちに對した。晩年は、東京の借家を抜け、江戸川べりに自持ちの小さな隠莊を構へた。日頃仰愛し奉つてゐた明治天皇さまの御歌を、謹書して頌つのを、終世の仕事に筆を染め出してゐた。娘たちもみな片付き、聳と一しよに泊りがけなぞで遊びに來て、彼は幸福でない晩年でもなかつた。

おやぢは六十三で癌でなくなつたのだが、死ぬとき、また、いかにもおやぢらしい死方をした。肺臓癌で、腫れものは頸のうしろに脹れた。これが色付き、いのちをとるまで二年かかった。醫者は當人に癌と知らすなど、家族一同を警め、當人はむろん訊ねない。療治中に腫れものは大きくなり、痛みは激しくなつたが、心配らしい言葉と、苦痛の訴へは一口も洩らさなかつた。

さういふときはちつと蹲つてゐた。おやぢはこれだけは屹度告げよと、日頃から厳しく私に命じてゐたので、私は死の機が迫つたとき「もう時機でございます」といつてあげた。

おやぢは「さうか」と返事をしたが、障子の硝子から晴れた空をつくつく眺めたのち、突如、枯れた兩腕を上げるやうにして「萬歳」を三唱した。それから間もなく落入つた。

女史の歿する數年前、よくこのおやぢが私の夢に現れて、禮をいつてた。夢とは思ひながら、私はこれを女史に取次いだ。女史は感慨深さうに「さう」といつて聞いてゐた。

女史の短篇に「家靈」といふのがある。他に女史の小説に、この種のことを扱つたものが多い。こゝに一つの血統といふものがあれば、それ相當に持つところの、價值と力がある筈である。滑らかにそれが搬出されない場合、家門の人間に歪曲凹凸を生ずる。しかし家靈は

手を變へ品を代へ、やはり人によつてつひに表現を見出す。家族然り、民族然り、今日時局を前にして日本歴史を顧みるとき、いかに潜みし「民族靈」とでもいふべきものの、質量が大きかつたかに氣付く。

萬歳を三唱して瞑目し、夢ながらにでも、禮に來もしたやうなおやぢが、嫁の女史の死に遭つて、未練氣に寫眞を護るべく、私の丘膚を破り山骨の佛を覗き出さした。家靈はなか／＼成佛し難いものかも知れない。或は更に新なる、潜める力と理想を提げ來つて、彼は私たちを通して現實へと、見參に及ぶ積りかも知れない。

私が、次におやぢに肖て來たことを、認めざるを得なくなつたのは、むす子が海外より歸り、兵役に就くまでの一年半、むす子と一しよに暮し、むす子の評言を聞いてからである。

むす子は父珍らしく、父はむす子珍らしく時間關はず語り合ふ。夜半である。このむす子は母親に似て鹽煎餅好きで、罐から出してはぼり／＼食べる。私はお茶を煎れてやる。四方山の話の末、むす子は苦笑していふ「おとうさんと話してゐると、おとうさんといふ人は實に始末に悪い人だね。氣が小さく臆病な癖に、負け惜しみと瘦我慢が張つてる。とき／＼無茶になる。有難いおやぢには違ひないが、とても梶の執りにくいおやぢだね」と。私はむす子

の炯眼けいがんに服しながら、述懐する「さうかも知れないなあ。なにしろ今までの生涯では、窮鼠きゆうしゆ却つて猫を食むやうな力で、推進して来たんだからね。僕が若し雅號をつけるなら、窮鼠きゆうしゆ猫喰ねこはみだらう。いやひよつとすると、僕のおやぢが窮鼠きゆうしゆ庵あん一世で、僕は二世の食描けこまみかも知れないぞ」むす子は冗談めくことが嫌ひで、このとき詰るやうな眼付でちつと父の顔を見た。

家靈は永遠に成佛せず、無限に、埋藏された價值と力を擡もたげて、人に促し來るところに、人を奮起せしめ、その意味で家人いじん共に即身成佛しつゝ、生くる道理が臚たげながら判つて來た。

然らば、いざ／＼來れいざ來れである。そして家靈といふものは、さうあつさり割り切れるやうな性質のものではない。現に私の家にしてからが、女史が擔ひ込んだ家靈の方が、何層倍か大きく、これが私の家に加はつて、強い働きをしてゐる。

どうも、それにしても父一人むす子一人の小人數では、いくら家靈を引受けても、これをこなす手勢が不足だ。私等の家は、結局藝術でお役に立たうとする、性質の家柄だらうが、それにしても手勢が不足だ。なくなる前、女史は、しきりに子供を生み度いといひ出したが、本能と深慮遠謀と、一しよになつてゐる女史としては、まことに理由あつて、果せなかつた願だと、歿翌年、孤影悄然たる中で私はつく／＼思つた。神佛に祈つても一つ俺れが生むかな

と、決心だけでもしたのは、あまりにも孤影悄然過ぎたからである。こゝにも親讓りの窮鼠きゆうしゆ庵あん食じ猫ねこの勇が奮はれてゐよう。

昭和十七年十一月二十五日
昭和十八年十二月三十一日
昭和十八年十一月二十五日
昭和十八年十二月三十一日
再發行
刷行版

(一萬部)

かの子の記

⊙ 定價貳圓參拾錢

(出文協承認)
ア481085)



發行所

東京市神田區一ツ橋二ノ五
振替東京四五一〇七番
電話九段四一八一番

小學館

著者	岡本一平	東京市赤坂區青山高樹町三
發行者	相賀ナヲ	東京市神田區一ツ橋二ノ五
印刷者	綾部喜久二	東京市神田區小川町一ノ二一
印刷所	宮本印刷所	東京市神田區小川町一ノ二一

會社登記第一二二三三號

配給元 東京市神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

5/W 70

小學館文藝書

岩崎良三譯	尾崎士郎著	齋藤弔花著	荒木十畝著	岡本一平著	小高根二郎著	沈從文著	鷺巣トモム著
老年に就いて	戦影日記	國木田獨歩と其周圍	東洋畫論	かの子の記	濱木綿の歌	湖南の兵士	支那の屏風
送價三・二〇〇	送價二・三〇〇	送價二・三〇〇	送價五・八〇〇	送價二・三〇〇	送價二・一〇〇	送價二・一〇〇	送價一・八五〇

近刊



